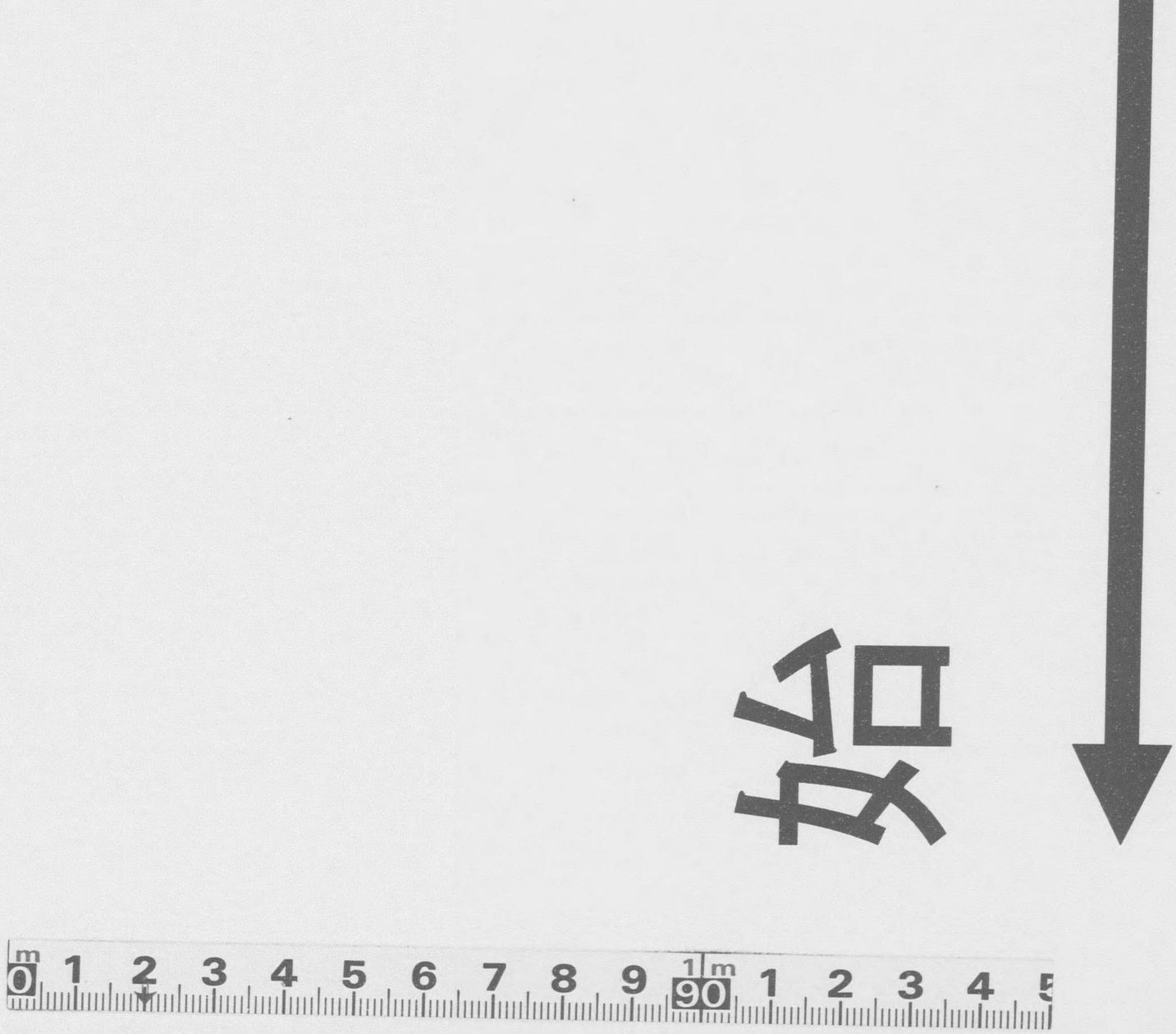
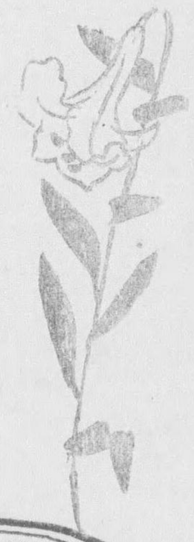

賀



大正
9. 11. 4
内交

特106
17

初戀

吟松亭共樂人著

一

「アー、アー、アッ、飛行機が亦飛んで來たよ。お父ちやん、彼方を御覽よ。ネーお父さん。」

二人の兄妹の可愛らしい輝いた目は、エメラルドグリーンの空上に漂ふ夕照の紅い雲、灰紫の雲、クリーム色の雲を縫て、プロペラーの音響勇しく、怪鳥の如に翔て行く飛行機の黑い姿を追ふて、共に空を飛でゞも居る如に、彼等の思は地上から離れて立て居た。飛行機は雲の影の如に薄黑い神秘な姿を浮ばして居る、富士山の方向

に飛去て行くのであつた。所澤へでも歸て行くのだろう。

「そうか。又飛で來たのか。」

父は、何の刺戟も感興も起さぬ如に、無關心に俯いて、依然として盆栽の植木に向て、默々として手を動かして居た。

夕餉の準備に世話しい母の德子は、食臺の脚を擴げながら、側に炊事の手助をして居た高子に吩咐けて、剪裁に出て居た父親や弟妹に夕餉を告げに遣た。高子は突と椽先から狹い剪裁に下りて行く、盆栽の松の枯葉を摘み取たり、平河天神の緣日の夜店で買て來た小さいドス黑い鉢の中で滿足氣に笑てる、アネモネや、人懷こい乙女の如に和かい甘い香氣を薰らして居る可愛らしい姿の菫などの手入をして居る、父親の傍に靜に行て、

「お父樣、お夕飯が出來ましたから召上て。正ちやんも操も直に來

らつしやいな。」

父の指光の動いて居るのに、茫然と立て優しい瞳を注いで居た。弟の正之進と妹の操も直に「えー」と答へて、姉の方に振向たが、又父の後姿を見護て居た。

高子は其頃東京女學館に通學して居たが、今年で卒業すると云ふ年になつて居た。女性としては肉肥へ紅い血の炎へ躍る十八と云ふ年ではあつたが、彼女は未だ全く初々しい所女で、若い男子の中に居ても含羞む如な樣子もしない、無邪氣な稍快活に過る如な娘で、而も文學趣味の勝た天才的の閃のある、純新な情緒や氣分を有た女である。同級生などは女文士とか、未來の雷鳥とか晶子とか稱で居た。彼女も其を多少意識して、將來は新聞か雜誌の婦人記者にでもなつて見たいなどゝ考へて居た。其で學科の餘暇には、新らしい小說集

とか、雜誌の短篇に至るまでも讀み耽つた。古い者も源氏物語、伊勢物語、枕草紙から古今集、萬葉集、新古今集、大鏡增鏡なども註釋書を買て來ては好で熱心に讀だ。古今集の歌などは半ば暗誦が出來る位に繰返しては讀だ。而して貫之と云ふ人の歌は好だけども、時々換骨脫體をする僻があるとか、淸少納言は敏感直情な所が佳いとか註釋書の受賣などを左も自分の獨創の見界の如に盛に說明をしたりなどするのには、友達の誰彼は耳を痛くする程に聞かされる者もあつた。父は斯麼書物を耽讀してる彼女を見兼ねて、時偶には「高子は小說の樣なものばかり讀でる樣だが、其麼暇があつたら學習でもしたり、お母さんの裁縫でもお手傳をなさい」と云て咎める事もあつた。父は盃裁に氣を奪はれて、高子の來て居たのを忘れて居る樣に振向かうともせぬのを、傍の弟の正之進が見兼て少し聲を尖らして、

「お父さん、姉さんが御飯だつてよ！。」

「そうか。今日は常日より早い樣ぢやないか。」

高子は一足更に父の方に近づきながら、

「否へ。餘り早い事はなくつてよ。既五時半よ。追々日が長くなつて來たものだから、其那氣持がするのよ。」

「然かね。其では正ちやんも操も行かうかな！。」

父の義之助は漸く腰を伸しながら、四方を轉見！、俄に氣付いた如に、

「高子、彼方を御覽、松平さんの櫻の蕾が隨分膨で來た樣だね。」

「眞實ね。最早一雨降ると、ぼつ〳〵咲き相なのね。」

「然だね。私も櫻の花も華麗で好きだが、梅の花の方が懷しい寂やかな所があつて佳い樣に思ふね。然ども其所に行くと松とか杉

とかの樣な常綠木は、時々手入さへして居れば、常も青々として居て實に善いものだな！。お前達も一時に華美でも直に散り失せて、頓て秋が來れば、葉までも枯れ果て、凩に吹き落されて、人の足下に蹂躙られて跡も形も無くなる樣なものにならずに、松や杉の樣に永遠も活き〳〵として變らぬ如な者にならなければならんと思ふな、高子。」

と父は一流の譬喩を以て、彼の永遠の生命を說いて聞かした。彼は同志社在學當時は、熱心な、眞面目な、寧ろ偏狹と思はれる位な信者であつた。學校を卒業た當時は地方の中學校に英語敎師として敎鞭を執て居たが、同僚などゝの折衝が餘り面白く行かなかつたので、已を得ず職を辭して、先輩の推薦に依て、基敎の牧師の職を奉じて居た。

「全くお父樣の仰言る通りだとも思ひますけども、松や杉ばかりで、

外に花も何も無かつたら、世の中が餘り單調で飽きてしまうだろうと思ふは。矢張り花も紅葉もあつて、散たり若々しい青い芽を吹き出したりして變て行くのが、面白いのだと思ふは。其に私は冬が來て、廣い平原に一面に白い〳〵雪が降てる中に、枯れて了てる樣な木が雪で太た梢に眞黑な鳥がとまつて、カーワ〳〵つと鳴いて、軈て餌食を見付けると、梢の雪を蹴立てゝヒユウツ〳〵と飛立つ黑い姿と、パラッと白烟の如に散る白雪と云たら、全く幽遠い律動が顫慄して自分に逼て來る如に、全身が戰いて腦皮が縮まる樣に思ふは。如何な畫の大家でも又如何な大音樂家でも、彼麼活々とした玄妙な畫や樂音を描き出す事は出來ないと思ふのよ。其故種々に變化して行く姿が眞の美の姿で其は假の相では無くて其こそ眞の宇宙の相では無いでせうかしら。」

「然だね、變化てふ事も美しいには違いないが、此宇宙を創造し給ふた神様は永遠に變り給ふ事は無い。變化して行くと觀へるのは、神様の働き給ふ假の相で、其變化の自然の奥深い彼方には、永遠に渡て變らぬ眞の神様の永刧不朽の世界があるのだ。吾々の罪の目には到底見る事は出來ないが、心を研ぎ澄し磨き立てゝ、其の眞の世界を求め、眞の宇宙を見なければならんのだよ。」

「でも、お父様……。」

と高子は更に何か言出そうと口籠て居たとき、側に茫然と立聞いて居た二人の子供は姉と父との話が薩張り解らぬので、悶感た相に、

「お父ちやん早く行かうよ。お母さんが待てるから。」

「うんそうか、行かう。餘り姉さんが理窟を云ふもんだから、すつかり忘れて居たよ。あはゝゝ。」

子供達に促がされて、父の高山牧師は漸く椽側に歩み寄て掌に手洗鉢の水を垂らしながら、

「お前達も手が汚れてるから、清に洗てお出なさいよ。」

彼等は順々に座敷に上て、家族の者は靜かに食臺を圍むだ。父親はゝに頭を垂れて、

「神様、今日も吾等に食ふべき日常の糧食を與へ給た事を尊く感謝し奉る。」

と常例の如に簡單な食前祈禱を捧げる。母を初め家族の者は、

「アーメン」

と、聲を揃へて祈禱に和した。母の德子は微笑やかな面を夫や子供の方に向けながら、

「大分日が長くなつて、追々暖くなつて來ました事ね、昨日菅野さん

が見へて、上野の彼岸櫻は、ちらほら咲き初めだと、言てゐらつしやいましたよ。」

母の德子と云ふ人は、柔和な交際巧な婦人で、相當名門の家に生れたので、多少教養もあつたので、時々「婦人世界」とか「婦人公論」など云ふ雜誌に寄稿する事もあつた。而して家庭内に人の妻としても三人の子女の母としても、貞淑で慈愛ある健良な婦人であつた。殊に高子には常に格別なる愛情を有て居たものだから、高子も自然母を非常に力と思ひ、たよりとして居るのである。夫の高山は妻の顏を見入りながら、

「そうかね、早いものだね！。其櫻の花で今高子と種々議論をして居た所だ。高子も何所で學て來るのか、中々理窟を云ふ樣になつたので、私も到底も適なぬ樣になつて來たわい。アハヽヽヽ。

で菅野君は別段用件は言置いては行かなかつたか。」

「否へ、格別何も。然ども先生が御在宅なれば、日曜學校の運動會の日取の事に就いて、御相談が申上げたいと云ふ事でございましたが。」

「そうか。其事ならば、孰れ明日會堂に來られると思ふから、其時に話しませう。」

父の義之助は夕餉が終ると、直に小さな書齋に消へて行て、明日の說教の想案を作る爲に、書齋に這入るや否や脆きつゝ瞑目して頭を垂れて、嚴に、

「能はざるなき神樣、貧しく弱き僕に語るべき汝の强き尊き御言葉を給へ。」

と心からなる靜かなる祈禱を捧げて、感應に觸れんものと、稍暫時は

默禱瞑想して、漸く頭を擡げて、學生時代から持古した背革の摺り切れんばかりの聖書を操擴げ、舊約新約の所々に朱線の施せる絶句などを轉讀し、又は新刊の哲學雜誌とか、英文の宗教哲學雜誌を見たり、或は書架の古い神學書や、宗教哲學の原書などを漁讀して、着想を得んとしたが、一向に思想の統一が付かないので、再び默然として硝子戸越に薄暗い窓外を恍惚として眺めて居た時に、腑と思ひ着いたのが、高子との櫻の花の話だつた。

「おうそうだ。「神を信ずる者の永生。」此の演題にしやう。」

斯く獨言ちながら、寂かに歩を彼方此方に運びつゝ說教の順序を考へ、思を練て大體の構想も略ば出來た後に元の座敷に再び出て來た座敷には妻の德子のみが雜誌に讀み耽て居た。義之助は德子に、

「子供達は皆何所かへ行たのか。」

「烏渡散歩がてら買物に遣りました。最早歸て來る頃だと思ひますがね。」

「おうそうか。先お茶でも一杯御馳走して呉れんか。」

「紅茶では如何でございます。」

「どちらでも宜しい。直ぐ貰ひたいな。」

「湯が少し冷めましたから、小時お待なすつて。」

と德子は靜に立て、暗い勝手元にパタ〳〵と消へて行た。

義之助は妻が讀みかけて置いて行た雜誌を見るともなしに、拾上げて、口繪や表題などを爪操て見ると、高山德子女史として「主婦としての女の務」と云ふ題目で、論說欄に掲載してある記事を見出し、烏渡好奇心に惹かれて、讀むとも無しに、目次に示してある頁を開いて見懸けた所に、妻が紅茶を持て出て來た。

「お待遠さま。私も一所に一杯頂戴しませう。」

と夫の前に寂かに腰を下した。

「御苦勞〳〵、時にお前此雜誌に何か書いてある樣だね。」

「はい。別に書くと云ふ考も無かつたのですが、婦人記者が來まして、何か是非共御說を承りたいと云ふものですから、其とはなしに話して居た事を勝手に此麼所に載せてあるのです。雜誌が屆いて初めて氣が着いた位なのですよ。」

「いや別に私は構はぬが、餘り彼麼雜誌などに深い關係を有つと、自然家事が忙しくなつて、子供達の注意などを怠てはと思ふたものだからだ。其はそうと高子も今年は女學校を卒業するんだね。成績は如何なだね。」

「そうですね。自分では隨分良い樣なことを言ては居ますが、如何

だか判りませんよ。けども彼の女は妙に學校の成績は良いのですね。何でも二週間程經つと、試驗が始まるとか云ふ話でした。」

「ふーん。而して學校を卒業したら、如何さす積かね。」

「左樣ですね。一度本人にも考を聞いて見る積ですが、妾の考では兎に角一時家事の手傳でもさせたり、活花を稽古させたり、又ピアノか何か音樂を少し稽古をさせたらと思ふて居るのですが。」

「私も實は然思てたのだが、高子は少し異た女だから承知をするかね。時にね、今度の傳道大會の結果は非常な盛會でね、五日間連夜、何の敎會も滿員だつた。中にも平安敎會には、一夜に五十八人の求道者が出來たよ。之も神樣の御惠の大なる力ではあるが、京都地方の人心が一般に覺醒しかけて來た象徵だと思ふよ。」

彼は京都大阪の地方に、基敎の各派聯合の傳道大會があつたので、其

應援演說に出懸けて居たのであつた。其が終ると歸路故鄕の信州に立寄て、母親を訪ふて、其の日の正午頃歸り着いたのであつた。

「序に國元へも鳥度歸途に寄て來たよ。」

「でお母さんは相變らず御健康でございましたか。」

「あゝ〳〵。健康で、皎と鬼ごつこなんかして遊でたよ。」

「まあ〳〵そうですか！。皎さんは今年幾才になつたのでしたかね。」

「明治四十三年に生れたのだから、今年四つになつたのだらうね。」

「そうですか、早いものですね……。あなた今夜はもうお疲れになつて居らしやるでせうから、お休みになつては如何でございますか。」

「そうだね。じや然しやう。直に床を陳べて貰ふとするかな。」

「は！。直ぐ陳べますから、お休みくださいまし。」

と云ふ妻の語に隨て、寢具の上に靜に座して、

「神樣、今日も僕をあなたの尊き御業に使役し給ふて、今安らかなる、靜かなる休みに就かせ給ふことを感謝し奉る。」

と微なる聲で、祈禱し、疲れた體軀を横たへて、彼は清き眠に就いた。

暫くすると、高子は二人の弟妹と何か面白相に語らいながら、格子戸をがらりと開けて、

「お母樣只今。遲くなりました。」

母は座た儘彼等の聲を聞分けて、

「もう遲いから、序に其所を締めていらつしやい。」

「お父樣はもうお休みになつたのですか、早いのね。」

「今日は大層お疲れになつたと見へて、もう先刻にお休みになつた

よ。正之進も操も、もう直にお休なさいよ。」

「でも明日はお休みたから、もう少し起きて居るの。」

「いけませんのよ。お前達が起きてると、騒擾しくて、折角克く休んで居らしやるお父様のお邪魔になるから。」

「はい。ぢやお母様お休みなさい。」

と、二人はさすがは日頃の母の掬育、薫陶の精神に習ひ從て、從順に母の命の儘に各々の設けられた、寢床に這込た。其後に母と高子は二人限りで、買物の話やら、さては世間話など四方山の語らひに母子の情の濃さ暖さは、恰も春の日に、花の一瓣の散るのにも心を傷ましむる如な優しい、和かな、春風の嫋々と戰ぐのさへ厭ふ如な氣分で相對して居た。斯樣な柔和な母に育まれて來た高子は十八の春を迎へたが未だ秋の如に荒める冷たい世の中と云ふものを夢にも知らな

かつた程である。母親は、

「時に高子、今度の試驗は何日から始まるの。」

と話題を一轉して、意味有りげに優しく尋ねた。

「此の次の金曜日からなのよ。だからもう明日當りから少し復習を始め樣と思ふてるのですよ。でもお母さん、何故唐突に其那事をお聞きになるのです。」

と、高子は多少自分に解せぬ樣な心持がするので、怪訝の思を懷いたから、斯反問して見たのである。

「何故と云ふ事も無いのですかね！。先刻お父樣ともお話をして居たのだが、お前も今年で女學校も卒業するのですから、卒業したら如何したものだろうつてね。其で私は一度お前の意志を尋ねて見ますが、私の考は彼の子もやがて年頃になるのだから、遲かれ

早かれは何所かの家庭の主婦とならなければならないのだから、卒業をしたら活花なり、音樂なり、何か家庭的の事を習たり、又家事の實習として幸ひ今の所手が足りないのだから、手助をさせては如何かと思ひます」と申上げて置いたのだけど。」

斯言ふて、優しい眦を上げて、高子の容子を讀まうとした。高子は一寸考へて、少し不滿らしい面持で、

「けどもね、お母さん。高橋さんは高等師範へ、田中さんは女子美術學校へ、寺島さんは女子大學の家政科へ、其他に矢張り同級の方で五六人も續いて學校へいらつしやるてふ話なんですもの其に寺島さんが是非女子大學の方へ一所に行きませうつて云てゐらつしやるんですもの。私も如何かして行きたいは。彼所の英文科の方へね。是非共ね、お母さん。」

と鳥渡鼻を鳴らして見せた。

高橋君子と、寺島竹子と云ふ二人の同級生は高子の最も親しい仲の好い朋友であつた。高橋君子は非常な勉强家で通つた女子で、意志の堅固な女ではあるが、容貌の餘り勝れない、何れかと言へば不姿色な方で、學校では模範生徒として、教師には常に賞められて居た。寺島竹子は柔和なので、他の生徒に好かれて居る。全く女學生には珍らしい位に行儀の正しい、女大學式とでも言たい樣な女子である。而して高子と此二人が常に學校では主席を爭ふて居るのである。而も三人共揃ふて皆仲好しで、其は他の生徒が羨む程である。

「私も出來る事なら、お前の希望通りにして上げたいと思て居ますがね。何しろお父樣の方でも種々の都合がお有りになるのだらうから、一應私がお父樣と相談をして、可成行ける樣にしてあげま

せう。」

母は娘に同情を以て斯語つた。高子は尙も聲に力を入れ。

「御相談て、お母樣是非行かれる樣に賴で頂戴な。」

と身體を拗戾しながら、甘たれる樣に母に强請た。

斯麽語ひをして居る間にも、尖鎌を持てる、時の神樣は、休みなく永刧球の上に動いて居て、既に十二時近くなつた。母は時計の針に驚いた樣に、

「おやつ、隨分遲くなつた事ね。もうやがて十二時になるから、直に休みませうね。」

「えー、ではそろ〳〵休みませう。……お休なさいお母樣。」

と思ひ〳〵の夢の世界に志して行た。高子は多少己が一身上に關する話だつたものだから、神經が興奮して暫くは目だけ閉ぢても眠

就かれなかつた。けども晝間の疲勞で、何時とは識らぬ間に遂々うつら〳〵と安らかな夢を結だ。春の短夜の明け易く、父の高山牧師は、早くも東雲の頃起き出でた。其からは彼の日課の一なる早天祈禱をして、聖書の數句を讀み、哲學宗敎の最近の思潮を研究し、後に新聞紙に目を通して、食膳に向ふを常として居た。十年一日の如く、身を所する謹嚴直行此の年月まで殆ど曉春眠の快など云ふ凡俗の快樂は知らないのである。子供達も續いて臥床より這出でゝ、母に依て定められた、日課として庭の掃除や靴磨き、且は各自の學科の下讀み復習など其々了して一家擧て樂しく朝餉を共に食するのを例として居るのである。

軈て九時頃になると、敎會堂の戸は開かれる信者の誰彼は、政治上のこと、會社の狀況、己が小供達のこと、妻の病氣の事など思ひ〳〵の職

業上や家庭の會話で、宗教とか信仰の上には餘り關係のなさ相な話を交しながら、ぞろ〳〵と教會堂に流れ込で來るのである。大工の安さんまでが今日は小薩張とした、折目の付いた衣物を着て、今朝の禮拜說教を聽きに來て居た。執事の中村、島村、川俣など云ふ連中は、牧師が歸宅して居られる事を知て、庭續きなる牧師の宅の方へ挨拶にと訪問をした。菅野も後から這入て行て、共に挨拶をした。其の中の最年長の中村が語の緒を切て、

「先生、今度は隨分骨が折れなさつたでせう。」

と云へば、一同の者も聲を次いで、「全く御苦勞樣で御座いました。」と一樣に少し頭を下げた。牧師は悠然たる調子で、

「いや、留守中は種々と御厄介でした。此度の傳道は全く時が好かつたのか、豫想外の好成績でしたよ。」

所謂熱心なる信者にして、頑固一撤なる小閻魔の如な面をした川俣は得意然たる面持をして、

「そうでせうな。是で日本にも追々眞のクリスト教が了解されて來て、クリストの光明に浴して救はるべき時が段々近いで來たのですな。吾々お互も大に此際奮勵しなくてはならないですな。やあー、皆さんもう時間が來た樣ですからぼつ〳〵彼方へ行きませうか。」

促す樣に座を立つた。菅野は小首を伸して牧師に向て小聲で、

「先生、實は日曜學校の運動會の事に就きまして、御相談がしたいのですが、時間がありませんから、禮拜の後で御話を申上げませう。」

「宜しい、其では後で。」

と高山牧師は簡單に答へた。菅野と云ふ青年は中學校を卒業する

と問も無く、第一銀行に入て、收納係を勤て居る、今年二十三の青年であつて、常も洋服を端然と着込で流行のネクタイを掛け、頭髪をテカ〳〵光らせ靴の爪先にでも埃などがかゝると、ポケットから布裂を出して奇麗に拭て、氣取り込で歩調キビ〳〵と歩くてふ、所謂ハイカラ男である。而も心中は頗る卑劣蠻カラの方で自己の位置や利益に關係のない者とは、同窓だろうが、舊友だろうが、殆ど交際もせぬ、否今までして居た者でも、自己の不利益な立場になつて來ると、斷然として交際を絶つてふ性質の男である。偶々交際すれば、自分の犧牲として友を賣り、友を裏切るてふ、實に陰險で、氣障な我利的青年である。其でも高山牧師は彼を正直な、模範的の立派な信者として、非常に好愛して居た。隨て日曜學校の校長としては、山本と云ふ辯護士があるが、實際の事柄は、皆此の菅野といふ男が爲る事になつて居る

のであつた。菅野は、

「では、後で申上げます。」

と續いて牧師の家を出て、會堂に向て行た。會堂には最早大分信者が揃ふてた。何れも殊勝らしい顔をして思ひ〳〵の天國や世界を心に宿して時を待て居た。時計がチン〳〵〳〵と十時を報ずると、當番執事の島村てふ、でつぷり肥へ太た、餘り締の無さ相な、鮪髭の先生が、突と立上り、「二百四十六番を合唱します」と一同に告げた。會衆はバラ〳〵と立上て、パイプオルガンの音に合せて、「我がよろこび我がのぞみ」と讃美の歌を悠やかに唱ひ始めた。牧師は後の方の入口から、愼み深い樣な態度で、靜かに堂内に這入て來た。而して敎壇の後の椅子に腰を下すや、一寸默禱して、穩と立て讃美歌の本を擴げて、會衆と共に小さな聲で合唱して居た。合唱が了ると兩手を前に伸

ばして、聽衆の心を押し靜める樣な形をすると、一同の者は頭を垂れる、牧師は尊嚴な聲調で祈禱を神に捧げた。讃美歌は再び合唱されて、愈々說敎は始まつた。牧師は先づ聖書の一節を幽暗に聲を慄しながら朗讀して、順々と說敎を始めた。高子も會衆の女席の中に混、て常例の通り聽いて居た。

「皆樣も御承知の如に、私は京都地方に傳道の大演說會が有りましたので、招かれて其應援の爲に四五日前から行て居りましたのですが、昨日の正午頃、漸く歸て參りました。實は其爲に今朝の禮拜には間に合はぬかも知れないと案じまして、若し間に合びませぬ時は中村執事に代て禮拜を願ふ積で、中村兄には其話を致して參りましたのでしたが、恰度全てが都合好く運びまして、幸に今朝の禮拜を兄弟姉妹と共にすることが出來たのは、誠に悅ばしく感ず

る次第でございます。で彼の地の傳道の模樣は非常に盛會でありまして各敎會とも連夜殆ど聽衆が滿員てふ、全く意外の好結果で之には本願寺の內部の紊亂、從つて僧侶の不熱心墮落等佛敎の幾分が墮落衰頽などに基因する、中流階級、乃至智識階級の眞面目なる研究心の發動とか、宗敎心の覺醒とか、或は靑年學生などが、西洋文明を研究する時に、基敎(クリスチヤニチー)の偉大なる根元的の力を偶然に發見して、其本流精神を知らんが爲に、各種の方面より研究を進める中に、忽然神樣の强大なる光に觸れて信仰の道に入る者も數多くある樣ですが、他の大なる源因は一般に信者が非常に熱心で個人傳道に全力を擧げて盡してゐるてふ、熱誠の賜であらうと、私は窃かに思ふのであります。吾々お互も此國民が悉く眞の神樣の光明に浴する樣にならしめんが爲には、此の傳道方法に倣て、否更によ

り以上に奮起努力して、神様の御心に適ひ奉りたいと、熟々感じた次第であります。」

と煽動るが如く、皮肉るが如くに、激勵するが如くに、暗々裡に諸君の努力の足らぬのを、憾とするてふことを諷諭的に說いた。けれども正直な、眞面目な、熱心な信者には、神の使徒とまで崇敬する牧師の此の言說は、神直接の啓示か、敎戒の如く、不可侵權威あるものとして、瞑目、默禱して窃に自己の神に盡す力の不足なるを思ひ、將來大に努力せんと心に誓へるものあり、又中には感餘て「アーメン」とか「ハレルヤ」とか、不意識中に讃辭を叫ぶ者もあつた。高子には、此聞き馴れた「アーメン」とか「ハレルヤ」とか人前で態とらしく聲を揚げて我こそは、信者の中の信者であると言はんばかりな面をして居る人々の心が何日とはなしに心傷ましく、殊更らしく、其人の何となく厚顏しい態度

を慊らず感ずる樣になつてた。尙其よりも父が神樣〳〵と言て神樣を賣物見たいにして生活の方便としてゐるてふ樣なことまでが、何だか淺猿しい職業でもして居る樣に、朦朧と考へられる樣になつた。而して人生と言なものは結局する所淺薄な事物の連續であつて、人間の一切の働は、所詮は詰らぬものゝ樣に思はれることが度々あつて、單獨で思に沈む時などは、全く消へも失せたい程寂しい悲しい事もあつた。其でも未だ失望の餘り自分を持餘すと云ふほどの事も無く又生命とか死とかいふ事を思ひもしたこともなく、其だけ撤底的に考へる力も勇氣も無かつたのであるが、心の中は時々思と惱みで滿ちてることもあつた。其でも弟妹と一所に睦じく樂しい話でもして居る時は、何にも思ひ煩はず、全く浮世と云う所が悅樂と光輝に充ち滿ちた樂園の如にも考へられ、殊に自然と云ふものが自分

には人間よりも以上に親しいものゝ如く、庭の木々の戰き、小鳥の快活な囀聲までが、悉く自分の爲の慰めてであるかの樣に嬉しかつた。牧師の方では其麼細い感情などは、何の關する所ぞてふ風な態度で更に語を一轉して、說敎のコースに入た。

「其が爲に、今日の說敎の演題は揚げて置きませんでしたが、神を信ずるものゝ永生」と云ふことについて皆樣に簡短にお話をして見たいと思ます。抑々宇宙といふものは神樣の大なる攝理でありまして、萬有は神樣の絕大なる愛の發現に依て、創造されたものであります。而して此の天地の創造主なる唯一の愛の神樣を信仰するのが、吾々基敎徒でありまして、此點が他の宗敎に勝れてる所であります。此の神樣は永遠から永遠に渡りまして、變り給ふことは無いのであつて、不斷人類の上に光明と惠愛を以て臨み給ふのであります。けれども神樣は人類に愛を以て向ひ給ふと同時に、罪を犯す者は嚴格に罰し給ふ正義の神に在すのである。而も如何なる細微なる罪も、又如何に奧深く隱れた所で犯される罪も知り給はぬと云ふことは無く、顯に罰し給ふのであります。」

と一段落を付て、其より舊約聖書の創世紀の卷から、神に反抗した者の亡びしことや、蠹魚は太陽に向へば滅亡すると云ふ樣な長い例話を以て、神の掟に逆く者の、神より罰を受くることに說き及ぼし、最后に、

「故に兄弟姉妹は此の神樣を誠心を以て、敬愛すると共に神の正義の道を嚴重に守て行かなければならないのであります。而して神の永遠の生命に入らんと思ふ者は、之を地上の植物に例令ば、散り易い花の如き、浮世の快樂にのみ耽らず、常に活々した常盤木の

様な希望と信仰とを心の中に抱いて眞面目に神様を信仰して行くことを忘れてならないと思ひます。之が基敎徒の信ずる永生に入る道だと考へるのであります。」

と説敎を結んだ。後に牧師は、形の如く祈を捧げで、彼は會衆に向て更に、「四百六十二番の讃美歌を合唱ます」と告げた。會衆の人々は齒の抜けた婆も、鼻汁を垂らした、いたづら盛りの子供も共に、「トキハモカキハモ」と聲波を揃へて唱ふた。唱ひ終ると、牧師が立た儘、三位一體の祈禱をして、禮拜を了た。

其から例のでつぷり太た、島村と云ふ先生が、眠む相な嗄た、力の無さ相な聲で、前週中の出來事や、靈南坂敎會に、來週の金曜日に、傳道說敎があること、今週中にある筈の種々の催の報告などして全く終りを遂げた會象はばら〳〵と立て思ひ〳〵に自が家路に散じて行た。

高子は父の說敎を聽く度毎に、此頃は如何なる理由かは解らぬが、父の說く所に餘り間違た所はない樣に思ふのに、何だか自分の本心に幾分か逆ふ樣な氣分がして、外の信者たちが恍惚として聽き入てる時にも、自分の精神の奥深い所に、何となく異た囁があつて、其まゝ聽き入れる事を碍げられるが如く、反撥するが如き自我の叫聲を聽くのである。父が神と云ふものを、神は宇宙を創造したなどゝ、宇宙を離れた超越的の存在として說く時に、何とはなしに耳に障る樣な氣がした。彼女には微かながら、宇宙は神の自現であつて、現象界と雖も、神の大生命の發露であつて、父の說く如く、神が庭師の如に其を創造して樂む樣なものでは無い。其が神の生命の一部であり、其所に神があり、其が神なのであると思はれるのである。其で自己も神の一部として、他の現象も、精神も、其組織の合成者として、其變形として、自

己を中心として見る事も出來る！。又感ずることも出來るのである。自分としては此の宇宙の力を最も強く味ひ得たる時が、最も多くの神の血が流れ、最も力強く宇宙の生命が自己の中に働いてる時であると思ふて居た。而して宇宙の瞬間と云ふものは、其生命力の連續である。其を連續して不斷強く感じ、多く呼吸して行くてふ事が、強く生きて行くと云ふ事である。神が人間の罪惡を罰するてふ思想の如き、復讐的の神を說くのも自分には疑はれてならぬ。實際神の大生命の上から觀れば、罪惡の如きものすらも一の調和をなして、庭の苔や飛石の如く、一種の變形であり、裝飾の如きものであると、明瞭には思ひ及ばぬけれども、微には其麼感じがするのである。けれども日常の生活の上に起る各種の事柄には、何だか自分が其を厭はしいと思ふ事もあり、又罪惡と考ふべき出來事もある樣な感じが

起て、其は然思ふてふ、其心其ものが宇宙の變形其ものであるとまでに廣く超然と考へる事は出來なかつたのである。彼女は實際に、現實と純思考と云ふものゝ矛盾に陷て苦み悶へてるのである。

高子は其の美しい少し思索する者が殆ど一樣に一度は通過する所の懷疑に捉はれて、平常の快活にも似もやらず、寂然暗然として沈鬱な風姿で、會衆の流出た後に隨て項垂れ加減に、會堂を出て自家の方にと歸て行た。

會堂には腮髭嚴しい老人と、切下げ髮の老嫗と、執事の人達の外に二三人居殘て、牧師を中心にして、思ひ〳〵の話をして居た。其の中に菅野も勿論加てゐたのである。彼は一同の會話の途切れたのを機に言葉を正して、

「皆さん、お話最中に誠に失禮でございますが、日曜學校の運動會の

日取と、場所に就きまして先生を初め皆様に御相談が申上げたいと思ひますが、實は此の件に就きましては、山本さんの方から申上るのが當然なのですが、今日は何かお差支が有てお見へになりませんし、先日御目に懸つた時に、君から先生に御話をして取り極めて呉れ給へ、と云ふお言葉でございましたから、已を得ず私から皆様に御相談を申上る譯なんですが、如何でございませう。日取と場所は何所に致したものでせうか。其だけ御極めくだされば、跡の方法は私どもで如何にか考案を致しますが。」

「そうだね。來々週の日曜あたりにしたら如何かね。而して、如何でせうね、中村さん、場所は少し遠いが、市内よりは、高田の馬場にしては澁谷の葡萄園が此頃中々好いてふ話だが、矢張り高田の馬場の方が廣々として、氣持が好からうと思ふがね。」

と牧師が第一に意見を出した。中村は、

「そうですな。場所は高田の馬場が好いでせうな。けども日取は日曜にするよりか、來週の土曜日の方が都合が好くはないかと思ひますがね。何しろ從いて行かうと云ふ人が皆勤める人が多い様ですから、月曜日では如何かと思ひますね。」

「中村さんの仰言る通り土曜日は、何せ半日はお勤めの方もお休みでせうから、正午から出懸る事にすれば、お勤め先に少しも支障なく行けませうね。勿論私獨なれば、一日位の休暇を取るには別段に構ひませんが、外の方に御迷惑ですと。」

と菅野は斯言放て、一同の面容を窺つた。牧師は「何日でも構はないし、又餘り變りも無いてふ様な無雜作な調子で、

「其ならば中村さんの言はれる通り、土曜日にしやうではありませ

んか。私はどちらになつても差障はありません。場所も一層高田の馬場と極めませう。皆さん如何ですか。」

一同は「それで結構ですとも」と賛意を表した。

「其では其運に致しませう。如何も種々ありがたうございました。」

と菅野は嫌に作た様な微笑を口邊に浮べながら、如才なく簡短に謝意を陳べて決定を告げた。中村は、

「諸君、もう正午になりましたから、ぼつ〳〵歸りませうか。別段今日は外に何も緊急要件もなさ相ですからと突と立上りながら促すと、他の者は皆待構へてたと云ふ樣な風に、

「其では御一所に其所まで參りませう。」「では」と一度に席を蹴立て〻「まあお先へ」「いや、老人から」などゝお互に謙遜氣を見せて居た。而して段々出て行た。牧師は默々として門の所まで見送る。一

同の者は門を出て「左樣なら」と一度に聲を揃へて別れを告げた。

牧師は鳥渡微笑を湛へて、

「失禮を。」

と彼等の後姿を見送て、直に踵を廻して住宅の方へ、バタ〳〵と歩んで行て、カラッと格子戸を開けて、默て座敷に上て行た。妻の德子は、

「少し早ふございますが、午飯に致しませうか。」

「左樣だね。好いでせう。」

午飯が了ると、日曜日だけは一家團欒打寛いで、二三時間の間、色々のお話をするのが恆例になつて居た。父親は八疊の室の方へ子供達を呼んで、

「皆な、此方へお出で〳〵。」

と言出すと、次の室に居た、子供等は惶急しく父の所に驅け出して行

た。高子も後から徐々と隨いて行て、少し離れて座て居た。母も少時してから出て行た。父親は妹の操を膝の上に抱きながら、輕快な調子で、

「今日は正ちやんにも、操にも面白いお話をしてあげやうかと思てるのだが、何のお話と思ふか、當てゝご覽。」

謎の如に斯言出すと、二人の子供は甘たれる樣に、先づ兄の正之進が、

「僕解からないは。」

と云ふて首を擔ぐと、妹の操も眞似る樣に、

「あたしも知らないは。」

と云ふ。父親は態と戯弄す樣に、鳥渡目を外らして、

「言はなければお話をするのを已め樣かな！。」

と言ひ懸けると、子供達は揃て、「それぢや詰んないな」「そんなら〳〵」と

交互に小鼻を鳴らして見せた。

側に居た母親は、

「そんなら、誰でも早く言ひ當てゝごらんなさい。」

と語を添へると、二人の子供は「そんなら當てゝ見るは」と年上の正之進が先に、

「星のお伽話だよ。」

妹も續いて兄に負けない氣で、

「兄さんのは違ふは。羊のお話なのよ。」

「お父樣當たでせう」と二人共自慢顔で云ふ。父は靜に頭を振りながら、

「違ふ〳〵二人共間違た。けれども正ちやんが鼻聲の藝當をして居るから、ご褒美に話してやらうかな。」

と調戯ふ樣に言ふと、子供達は早安心したと云ふ風に、聲を靜め、耳を立てゝ、父の一言をも聞き洩すまいと待構へて居た。父は低い聲で、

「其は、日曜學校のことだよ。」

子供達は、じれつた相に、

「日曜學校の事て何！。早く話してよ。」

「日曜學校の運動會をね！。次の土曜日に、高田の馬場でやるんだよ。だからお前達も菅野さんから、やる事を好く聞いて置いて、競走でも何でも一生懸命におやりよ。解たかね。」

と駄目を押して言た。子供達は嬉し相に、

「お父樣、其は眞實！。そして何時！。」

「そうだつたな！。時間を話さなかつたか。正午から出て行けば丁度間に合ふのだから、學校から歸て來てからで宜いんだよ。お

前達の方が、此頃は偉くなつた。時間までに氣が付くのは。」

と煽動て上げる、子供達は手を拍て、

「嬉しいなー。〳〵。」

と大喜びであゞ。彼等は觀覽物と云ふものは、活動寫眞ですら、教育上有害だとして、父から堅く禁ぜられてあるのであるから、日常の生活から少しでも異た事が、非常に樂しく愉快に感じられるのである。殊に春秋二回の運動會は、籠から放たれた鳥の思で、殆ど夜の目も合はぬ程の喜である。其でも母は父に秘密で好い音樂か、活動寫眞などがあると、子供達を連れて行く事もあつた。其で幾分か常識が養はれ、審美心が育れて行くのである。時偶には無邪氣な子供達が、調子に乘て、父に面白かつた話を、無意識にして、其から事件が暴露して、父の逆鱗に觸れて、母が恐縮頓首する事もあつた。

父は高子の方に振向いて、

「高子、お前も運動會に行くかね。」

「私は未だ試驗が終で見ないと解りませんは。」

と高子は言葉を濁した。其の話の最中に子供達の友だちの徒つ子が四五人、垣根の外にやつて來て、「高山さん遊ばないか」と呼出す。二人の子供は恰で召集令でも受けた兵士の樣に、直に應答をして父の膝から遁れ出した。後には父と母の外は、高子だけであつた。父は妙に語調を改めて、高子に向てしんみりとした語で、

「お前の學校の試驗は何日から始まるのか。」

「此週の金曜日からなのよ。」

「そうか。それでお前は卒業するんだね。」

「えー。そうです。」

「昨夜お母さんとも話をして居たのだが、卒業してからは、お前は如何する積りで居るのか。」

「お母さんにもお願してあるのですけど、女子大學の方へ續いて是非共行きたいと思てるんですけど。」

「けれどもお前、私の方にも經濟上の都合もあるし、又お前も何日までも小兒では無いし、女と云ふものは、相當の年頃になつたら、結婚をしなければならない。之が社會に對する、女の義務でもあり、又當然しなくてはならぬ事柄だ。大體獨身主義など稱へる者があるが、彼れは西洋文明を生嚙にした、所謂新らしいと自稱する莫蓮女の一派の主張する事で、自己の天性を無視した淺薄な偏見で、雷鳥とか時鳥とか云ふ女の末路を見たら大抵想像が就くよ。雀とか燕とか云ふ男と野合して、遂に父なし子を産まなくちやならぬ

様になり、自己の淺見を社會に曝露して居るでは無いか。亦女子大學の吉井とか吉村とか云ふ女教師だつてもそうだ。初めは理想の結婚だとか、眞の戀愛だとかと云て、先輩や知己などが、結婚を勸める者があると、博士以上の資格がなければとか、或は然もなければ自分の下に奴隷の如に服從を甘ずる男で無ければ嫌だなどと、勝手氣儘な熱を揚げて居たが、遂々其中に人が對手にしなくなつて、婚期を失てしまつた。三十八てふ年まで孤獨生活を續けたのは惡くはなかつたが追々年が長けるに從て、性の寂寞の感にでも耐へない樣になつたと見へて、自分が以前に幼稚園で教へて來たと云ふ、自分の子の如な、二十歳になる慶應に行てる書生と何か妙な關係で、遂々去年結婚をしたと云ふ話だ。自分としては、其でも眞の戀愛を贏ち得たとかと云て、滿足をして居るかも知れぬが、

第一男が可愛想た。近隣の人は彼麼のが永く續くものだらうかとか、女と云ふものも可笑しいものだ、何と思て今更結婚したのだらうかとか評判取り〳〵だ。識者は顰蹙て居る相だが、全く好い物笑の種だよ。其で當人も此頃は面映いと見へ、道を歩くのでもこそ〳〵と道端を通て行く相だ。だから女は其那に高等教育と云ふものゝ必要は無い。女學校さへ出て居れば今の日本の狀態ならば澤山だ。でお前も少しは家事の見習でもしたり、音樂でも習いに行たら如何だ。お母さんもさうさしたいと思てるのだから。ね、そうしなさい。」

と滔々と喋言り續け、說き續けた。高子の心の中には、父は人の精靈を牧するのが職でありながら、他人の精神生活とか、靈的生命を重じぬ、世の中の外觀に捉はれ、形式などに已而拘泥する人だと悲しく思

た。而して顔面に薄く朱を注ぎ、少しく語氣を強めて、

「私は結婚をしたくないとは、思て居りませんは。けれども未だ時期が早過ぎます！。而して私は如何してでも、も少し學問がして見たいと思ふてるのです。其に先生も是非共、てお勸になるものですからね。高橋さんは高等師範の方へ行らしやる、寺島さんは女子大學の家政科の方へ行らしやるんだ相ですからねー、お父樣、私も女子大學の方へ入學さしてくださいな。寺島さんと一所に。何卒ねー。一生のお願ですから。賴みますは、お願しますは。」

と後にはおろ〳〵と聲を震はして父親に强請た。父親も思案にくれ、仕樣がないてふ顔容をして、

「仕方が無いな！。其那に無理を云ては。其でも今直に極めてやる譯にも行かん。兎に角一應考へて見るから、暫く待て呉れ。其

れで若し入學が出來たら何を研究する積なのか。」

「英文科の方へ入學したいと思てるのです。」

「文科なんて、仕樣がないぢやないか。」

「だけど都合に依れば英語の教師になつても宜いし、又私は日本の女にも一般に未少し教育が必要ではないかと思ふてるのよ。」

「先好い、兎に角暫く考へとくから待て呉れ。」

「お父樣、きつとですよ。」

と高子は最後に重く念を押した。

父は近來高子の容子が少し妙に時々茫然として居る樣なことがあるのを思ひ出して、斯尋ねた。

「お前此頃何所か身體が惡いのではないか。時々ぼんやりして居る樣だが。少し顔色も惡い樣に思ふが。」

「否へ、別に何ともありませんは。」

と平然と答へては居るが、彼女は近來何かに就けて、精神上の懷疑に陷て居たのである。世の中の實際上の生活に於ては、其が牧師の如な所謂神聖なる職にして、精神を主として生くべき人ですら、自分だちが考へてる如な世界とは、全々驅け離れた、異た世界に棲で居て、讀だり學んで居る事柄とは非常に矛盾胴着が多いものだと思て居た然ども彼女は其を父に正そうとも思はず、父が若しも變違た觀念を有て居るならば、其を啓發し、扞正して、自分の信念も其に依て强め、確めて行かうと云ふだけの勇氣は無かつたのである。其は自分が一人の小娘として、議論めいた事を言ふのは、餘り女らしくないと思たばかりではない。父と云ふ人は、當世の中の實際や、種々の形式とか範疇に捉はれた人であるから、到底も自分等の精神上の考や、靈的律

動と調和を保て行くことは不可能だと思て居た。其に自分として も、思想上の勇氣、信念には幾分貧弱であることを自覺して居たから一層話さないで、自分一個の心の奥深く秘して置けば、波瀾なく平和で好いと考へて居たのである。父の方では高子を世間の實際てふものを知らぬ小娘で、想像や空想から描き出した書籍や雜誌などの世界に沒頭して棲息して居るのであつて、自分も曾ては經過して來た經路を踏み辿て居るのであると察して居た。だから軈て相當の年を經て頭腦が固まつて來るに從て、氣質が變化して行くものだと想像して格別に氣にも懸けず、深く追窮もしなかつた。而して更に父は温和に、

「其ならば別段に心配もしないが、何所か惡いのならば、注意をしなくちやいけないよ。」

母の德子も多少氣懸りになつて居たと見へて、

「眞實に、お前何所か病氣ならば、お醫者樣にでも診察してお貰い、餘り酷くなるといけないからね。」

と側から心配氣に言添へた。高子は少し語氣を强め、

「否へ、お母さん、眞實に何ともないのよ！。」

「そんならば、宜いけども。」

と母は樂觀家だけに、高子の答に直に安神をした。

「おーそうだ。今から鳥渡永田町の梅野さんの家へ行て來るから、衣物を出して貰ひたいね。京都の原君から依賴されてた事をすつかり忘れて了て居た。」

父は母の出した衣物と着換へて、こと〳〵と出て行た。母と高子も臺所の方へと座を立て行た。

二

五日と云ふ日は、夢と現とに過ぎ去て、五月雨時の空の如に不斷黑い雲が垂れ籠めて晴れやらぬ樣な陰鬱な氣分に鎖される、卒業試驗の始まるのも愈々今日からとなつた。けれども高子は平日地道に勉强をしてあるから、格別多くの學生がする樣な試驗勉强に狼狽する樣な事はなかつた。其でも其翌日の試驗科目だけは、敎科書に目を通して置いた。時々は平常餘り成績の好くない生徒などは、不已得して休んだ爲に如何しても理解らぬと云て、英語とか、歷史の本を持て家に訪れて敎はりに來た。高子は面倒くさがる樣子は少しも見せずに、別に高慢振る風もせずに、丁寧に敎へてやつた。其樣にして來た生徒は全く先生に敎るより詳しく、克く理解りましたと、禮を述べて喜で歸て行くのである。試驗の問題は案外に容易い所が多か

つた。而して他の生徒が「試驗は好く出來て」と尋ねる者があると、彼女は「否へ、餘り好くも行かなかつたは」と謙遜はして居れど、矢張自己の內心には、可成好く出來たと思て居たのであつた。其でも成績が發表されるまでは、矢張り同じ樣に幾分不安の思にかられ勝だつた。而して若しか高橋さんか寺島さんに首席を取られては殘念だとも思ふて居た。

卒業證書の授與式は、四月の十五日と決定した。高子は如何な成績が發表されるだらうかと、暗い喜しさを含だ氣分で、其日を千秋の思で待て居た。

試驗が終て六日目の四月の十日に、高子は彼女の最も親しい友なる、寺島竹子の家に訪問した。寺島竹子は、五番町の高橋君子の家に正午過に尋ねて行て、今自家に戻たと云ふ所だつた。而して奧に這入

て衣物を着換へてる所へ、女中が「高子さんがお見へになりました」と取次ぐと、竹子は、

「其では今行きますから、表の八疊にお通し申しといて頂戴な。」

と命じつゝ、着換へ掛けた衣物を更に着直して、直に高子の案內されて居る八疊の室に姿を現はして、左も親しげに、

「好く來てくだしたのね。今高橋さんの家から歸たばかしなのよ。今少し早く來らしたら、門前拂だつたのよ。」

と、挨拶もそこ〳〵に座た。高子も打解けた樣に、

「そう！。矢張り私は神通力が有てて、自然に感應するんだわね。おほゝゝゝ。其れはそうと、高橋さんは如何な面容をして居して

「如何な面容て、別に古くも新らしくもない例の顏よ。」

「あなたも通じが惡いのね。」

「どうせ、あなたの様な秀才とは違いますからね。」
と烏渡拗戻る眞似をすると、高子は、
「そうぢやないのよ。何か面白いお話でも無かつたのですか。て聞いてるのよ。」
「否へ。別に變た話なんかありやしないは。けども學校では如何しても、高子さんに敵はない、つて言て居らしたゞけよ。」
「冗談ばかし。好く覺へて居らしやいよ。」
「眞實まゝ。其であなたは、之から如何するのだらう、て心配をして居らしてよ。」
「あらつ、そう。其事で妾も汝と御相談がしたいと思て、今日は來たのよ。」
「相談て、如何な事なんですか。」

「別に如何な、て云ふ事も無いのですけど、汝直に女子大學の方へ行らつしやるんでせう。私未だお父様が確然極めてくださらないから、如何なるのか判らないので心配ばかしして居るのよ。私あなたと一所に行けるか如何なるか知らと思てるのよ。」
「お父様に熱心に懇願たら、吃度行けますよ。是非一所に行きませうよ。私もお父様に賴むのを加勢して上げるは。連が無くちや淋しいんですもの。」
「そう！。あなた好い事を敎へて呉れたは。あなたが一所に賴んでくだされば、必然許して呉れるだらうと思ふのよ。」
「そうですか。其ぢや卒業式の翌日、あなたの所へ行きますは。而して大に加勢するは。」
「必然！。あなたしつかりやつてくださらなくちや駄目よ。私の

お父様は、彼れで中々職業柄雄辯なのよ。」

「大丈夫ですよ。私が從いて居ますから、安心して待て居らしやいよ。けどもご本人が躊躇して居ちやだめよ。」

「私は一生懸命になることよ。けどもあなたの方が頗る不安らしいですよ。」

「其麼に、心配ならお止しなさいましよ。」

と竹子は空嘯いて見せた。高子は、

「あなた怒て居らつしやるの。今から斯麼内訌を生ずる樣では到底も肝腎の外交談判は首尾好く行かないは。おほゝゝゝ。」

「でも餘り見縊てゐらしやるんですもの。」

と鳥渡白い眼で瞰で見せる。二人の此那會話の最中に、襖をスー、と開けて先刻取次いだ、お鹿と云ふ三十格好の女中が、茶を運んで來た。

「何卒、お茶を一つ召上て。」

と盆に載せて來た茶碗を置きながら、更に、

「お嬢樣、只今美夫さんがお歸りになりました。」

と告げた。天野美夫と云ふのは、寺島竹子の祖父の義姉妹の里方なる、横須賀の海軍御用商人として、相當に手廣く營業をして居る、天野爲藏の長男である。彼は身體のすらりと高い、細面の、歩き振のふわり〳〵と大地を確かりとは踏みしめて歩かない樣な、而して眼付の非常に優しい、潤んだ細い目で、常に夢や、幻影の世界ばかりを觀て居るのかと思はれる、樣な青年である。文學や繪畫が好で、中學時代から雜誌の懸賞文などで、一等賞を得たことも屢々あつた。父天野は彼を自分の相續者として、中學を卒業した後は高等商業學校か、慶應の理財科へでも入れて、實業的智識を授けて、彼に家督を讓り、商業の

後繼をさせる積だつたのだが、彼が如何しても高等商業や、慶應に入學するのを、肯ずして、早稻田大學か、帝國大學に入て、是非文學を修めたいと主張したのであつた。けれども父は昔氣質の頑固な禪宗の信者であつた。從て文學などゝ聞くと、彼の蠟の如に青白い顏をした、放縱な、乞食見たいに長く髮を伸した、ぞろ〳〵として居る優柔な姿を想像せずには居られないのであるから、自分の子として、彼麼へな〳〵した人間の仲間入をさせるには、到底も忍び難い事であると、して、絕對に反對した。而して父の爲藏は「其麼に自儘な事を云ふのなら、如何でも勝手にしなさい。今後は一切學費は遣らぬ」と威壓をして見たが、彼は一向に自己の主張を抂げなかつた。其事を親戚の者が聞き付けて、仲に這入て種々話をして見たが、父親は如何しても文學は學ばしたくないと頑張るので、已を得ず美夫に說き付て、一步

を讓らしめて、美術學校には是非共入れてやつて呉れと、親戚の者が賴んでやつたものだから、遂々父も少し我を折て、不性無性に同意して、美術學校に入る事になつた。既に今年の二年級の試驗も終で、本年の四月には順當に行ければ、卒業するのである。美術學校に入て後も彼は數寄の道として、不斷文學書や哲學の書物を耽讀して居た。而して美夫と云ふ本名で、文藝美術雜誌などに新體詩や論文めいたものを出して居たのである。彼が入學した其年から、彼の父が依賴して監督がてら、此の寺島家に預けられて、此家から通學して居るのであつた。竹子は女中の語に別段に興味も惹き起さぬ樣子で、

「そう！。」

と單に答へた。女中の去た後に、高子に向ひ、

「美夫さんて方は、私家の親戚の方ですがね、溫和しい、好い方ですよ。

其で文學が大好きで、常も詩や、論文なんか書いて、雜誌に投書してゐらつしやるのよ。あなたも文學が大好きだから、必と好く話が合ふと思ふは。」

「而して今は何をして居らつしやるのです。」

「今は上野の美術學校に、此家から通學して居らつしやるの。來年卒業になるのですよ。」

高子は滅多に竹子の家には、訪問した事は無かつたので、遂ぞ此青年に會見た事も、話を聽いた事もなかつたのであるから、彼の青年の事に就いては今日初めて竹子から話を聞くので少しも知らなかつたから、

「何日からあなたの家に居らしたのですか。」

「學校へ入學した時から居らつしやるんだから、もう滿二年位になるは。」

「そうですか！。滅多に居らつしやらないと見へて、妾お目に懸たことがなかつたのね。」

と高子が多少好奇心を動かしたらしい樣子を見てとつて、

「一度會見てご覽なさい。割合に淡白で、好い方だから。」

「そうですか。では又他日か紹介して頂戴な。」

と斯麼話をして居る所に、美夫は「竹子さん〳〵」と叫びつゝ、襖の外に洩れる話聲を聞付けて、立ながら、

「竹子さん、何をして居るんです。信ちやんが錦輝館へ行きたい相です。一所に行きませんか。」

と何氣も無く襖をスーツと開く突端に二人の視線は鋭くも彼の方に注がれた。而して其刹那に高子の眼孔からは異樣な輝を放た。

竹子は寂かな調子で、

「今お友達が來て居らつしやるから、行けたら後からでも行きます
は。」

「妾はもう何も用事も有りませんから、歸りますよ、だから一所に行
らつしやいな、ね！。竹子さん。」

「でも！。何だか逐出す樣ね！。」

と竹子が遠慮して躊躇してる樣子を見て、高子は、

「構はないのよ。其ぢや門の外まで一所に行きませう。」

、竹子は襖の所に立ち竦でた、美夫に、

「美夫さん、まあ此方へお這入なさいな。此の方は、妾の一番仲の好
いお友達だから、構は無いことよ。」

と言はれて、美夫も座敷の中に這入て目を外らして座た。竹子は、

「高子さん、此方が先刻お話した、美夫さんて方よ。」

と紹介された。美夫は輕く會釋して、

「僕は天野美夫と云ふ者です。宜敷く。」

高子は今までの快活にも似もやらず、何となく面映相な樣子をしな
がら、

「私は高山高子と申します。どうぞよろしく。」

と俯伏しながら、應答はしたものゝ、不思議な位に氣恥しく、照れる樣
な氣分に襲はれた。而して此時高子は慥に生れて初めての胸の皷
動を感じ、何とも言ひ知れぬ呼吸を呼吸したのであつた。其は其時
彼女には何であるかは解せられ無かつたが、何ものかの強い衝動に
ショックを感じたのであらう。而して美夫の姿を見るのは何か輝
ける物體を見る時の如に目映く〳〵思はれた。

「其では高子さん、失禮ですが參りませうか。」

と竹子は二人を促して立つと、高子も美夫も立上り、

「參りませう。どうもお邪魔をして、濟みませんでした。」

と高子は挨拶して玄關口の方へ出懸けると、美夫の後に信吉も續いて出て來た。門前で竹子は高子に、

「あなたも一所に行らしてはどう。」

と氣を引いては見たが、高子は直に應答して、

「今日は早く歸らないと怒られますから失禮しますは。又此の次にお伴しませうよ。左樣なら。」

「では此次に是非行きませうね。左樣なら。」

「どうも有難ふ。では十六日には是非お願しますよ。待て居ますからね。」

「え！。間違なく參りますは。」

高子は磁石から離れる鐵の如に、共に引きつけられる樣な思をしながら彼等三人と別れを告げた。而して種々の思に耽りながら身體の中に溶入る如な春の夕陽を全身に浴びつゝ、自が家路を急いだ。

彼女の思は美夫の超然とした、無邪氣相な態度などを更に深く印象して、幻影の如に目の前に浮ばしめた。

高子が竹子の家に出て行くとすれ違ひに、菅野は高山牧師の宅に訪れて來た。彼は今日は例の日曜學校の運動會の準備に關しての打合せの爲だと云て來たのである。

「御免なさい。」

と格子戸を、がらりと開けて這入ると、直に可愛い操が走り出して來た。菅野は馴々しく、

「お父ちやんは。」

「奥にゐるのよ。」

と可憐らしい聲で答へると、菅野は默て靴を脱いで上り掛ける。操は先に達て、チヨコ〳〵と父の居室に馳けて行て、父の前に立て、

「お父さん。菅野ちやんが來たよ。」

「そうか。」

と牧師は立たうともせずに、紫檀の机に倚た儘、眼鏡越に不相變書物を平氣で見て居た。全く菅野の來るのは、家族が外出から歸て來た位にしか、彼の心には刺戟を與へないのである。菅野の方でも來客の有無も何も尋ねずに、つか〳〵と彼の居室に這入て行くのであつた。之が肝膽相照すと云ふべきか、或は靈氣交感するとでも云ふのか、何日の間にか儀禮の厚い墻壁は破られて、互に有無相通ずる間柄

となつて居た。今は師弟の關係と云ふよりも、寧ろ親子と云ふ語が適する程に親しかつた。彼と牧師の間柄を知てる程の者は、信者と云はず、近隣の人々までも「菅野さんと、高子さんは何日結婚式を擧げるのでせう」と噂やら憶測をする位に、菅野は苦心もし繁々と交通して、高子に接近しつゝあつたのである。子供の風邪惹きから、母德子の齒痛までの御見舞はする、子供が奴凧を揚げれば、其連となるてふ全心を込めての奮戰振に目指す敵の馬なる兩親は既に射倒されて既に暗默裡に彼女の將來の夫としては、菅野と已而思て居るらしかつた。而して順回集會が少し遠離の信者の家に催される時などは、彼と牧師は、多くの場合二人限りで歩いて歸た。其那場合に牧師は、「君も最早徐々妻帶をする方が好いな。高子がも少し年が長て居るとな！」などと諷示する事もあつた。彼は其那時には態と超然たる

態度を見せて、「未だ〳〵早過ぎますよ。未だ結婚の資格がないですから、先四五年經過て第一資格を作てからです。」と何氣なくは答へては居れど、彼の心中には牧師に此麼話を聞かされた時は胸に嬉しさの押へ難い焔が炎へ立た。而して馬の主、高子の各宣を待てども高子は一向平然たる態度で嫌ふと云ふ素振りも無ければ、又特異な感情を自分に寄せて居ると云ふ零圍氣も見へない。只彼が訪問すれば、菅野さん〳〵と親しくはするもの丶、何の變哲も無かつた。其が結句菅野には何となく物足りない、難忍しい樣な氣がして居たのである。今日も格別敵情の視察と云ふ譯でも無いが、些細な用向に託てやつて來たのである。

「先生今日は例の運動會の順序の校正刷が出來て來ましたから鳥渡目を通しといて載かうと思ふて持て參りました。お邪魔です

が。」

と菅野は洋服の衣囊から、一枚の活版刷の紙片を摘み出して、牧師の前に置くと、牧師は應揚な態度で、

「左樣ですか。其は態々御苦勞だつたが、別に私に見せて貰はんでも、君さへ可然見て置いて呉れさへすれば結構だつたのに。」

「其でも鳥渡目を通しといて載かんと、私の責任が重くなりますからね。」

「なーに。責任も何も無いよ。斯麼ものは內輪同志の事なんだから、肝腎の所にさへ間違が無ければ、其で好いんだよ。」

と言ひつ丶、菅野の突出した刷物を手に取て、視線を其上に投げて、低聲で讀み上げて、

「正午十二時敎會前集合の事、としてあるが、十二時は晝飯に都合が

悪いことは無いかね。一時にしては如何かね。十二時を。」

「そうでしたね。少とも氣が付きませんでした。然しまだ印刷してある譯ではありませんから、早速訂正させませう。もう外に誤た所はございませんか。」

「其だけらしいなー。」

と彼は菅野に刷物を押し返した。菅野は其を衣嚢に納めて、側に所在なさそうにして居た正之進に向ひ、

「正ちやん、もう學校はお休みー。」

「えー。二三日前からお休みになつたの。」

「而して今度は何日から始まるの。」

「十八日から。」

「ぢや休の中に、私の家へ一度來らつしやい。面白い物を見せて上

げますよねー。」

と二三言會話の緒を得て置て、高子の姿が見へぬので、

「お姉さんは。何所かへ行たの。」

「あゝ。お友達の所へ行く、て先刻洋傘を持て出懸けて行たよ。」

「そうー。」と別に氣にも留めぬらしく言たものゝ、又聞いて見たくなつたので、「何時頃」と再び尋ねた。

「僕明確と時間は知らなかつたけど、一時間半位前だつたよ。」

と菅野は斯も不斷高子の影を腦裡に宿しては居れれど、彼女が自宅に居れば未だ別に如何すると云ふ事も無く、只何とはなしに心持が好い喜しいてふ位の事だつた。

人は自己の慾望と云ふものを有て居て、其慾望の衝動は知て居る。然ども其は恰も空氣があるから、風と云ふものが吹くてふ現象は知

て居る。而も空氣は何故に生じたか、其から起る風は又何の爲に常に梢を鳴らして居るかを知らないと等しく、世の中の人間は同じ元泉から汲んで來た生命と云ひ、空氣と云ひ、光と云ひ、草木、鳥獸と云ふ現象の如き、自己の環境は知て居ると思て居る。又神樣とか、觀念とかは、自己の精神上の對境として識てる如く感じてる。而も同じ源泉から流れ出て來た、物質なり、精神なりは、各々其自性と聯關して居るものは知て、居る樣であるが、其すらも、大海の一波上を航する船舶であり、又は木片であるが如き經驗の綜合に依て、其を感知し得るのみである。物質は物質而已を知り、精神は精神を而已經驗するを得るのであるが、其所に綜合を求め、統一を欲するのが、物心併行の人間と云ふもの丶狀態である。故に精神上の法則の物質上に行はれ、物質上の影響の精神界にまで及ぶと感ずるのは、各々の域内に新たな

るもの丶流れ出たのである。源泉は永遠無窮に源泉である。源泉は不可知である。不可知の陰影は精神である。精神の陰影は物質である。科學者は陰影より陰影を發見せんと欲し、哲人は陰影より不可知を求め知らんと欲して、千古の昔から所謂努力なるものをして居るのであるが、而も不可知は只不可知の域を出ずして、實に此悠久の不可知球を廻て不絶蠢動して居るのが、人間の淺猿しい姿であり、努力なのである。哲人と云ふ者は之を揣摩し、臆測するだけの特異なる精神現象を有て居る而已であつて、全てのものは、不可知界を知らんが爲には、不可知界に復歸し得る唯一の方法である死と云ふ方使に依て源泉に復歸するある而已だ。而して人は此の不可知と云ふ源泉から、眞直に一本立に生へ拔いて來た一本の樹木であつて、一旦源泉を離れ出たものは、深く源泉に迚入らざれば、其が宿して

居る内部生命の流を、其が精神を知る事は出來ぬ。又其自身ですらも、深い、内省なきものは知り得ないのである。菅野も高子の生命に宿る影、精神に映る姿は、同じ影なる彼には解らないのも理である。徒に揣摩憶測する而已で、高子に今日し宿た、新らしい、清い影は憐れ知る由もなかつた。

彼は時を遷して、高子の歸るのを待つべく、少時は牧師と世間話などを、再び始めたが、一向に歸て來そうな樣子も無いので、氣は進まぬが、不已得思を遺して、

「大分遲くなりました。別に今日は外の要件もありませんから、之で失禮を致します。正ちやん、左樣なら。」

「では、もう歸るかね。左樣なら。」

と牧師は座た儘輕く別辭を告げた。正之進だけは玄關まで從て行て送た。

「左樣なら。」

とすた〳〵と歸て行た。

高子の待ちに待た、試驗の成績は發表された。而して卒業證書授與の式も擧行せられた。高子は豫期した通りに、首席であつた。而して次が高橋君子で、三番は、豫想に反して、小林富子と云ふ、常日も陰鬱な青い顏をした女子が占めて、寺島竹子は四番に下た。朋輩の誰彼は高子が平均點數九十五點と云ふ稀有の優等な成績だつたのを賞讃して「あなたほんとに偉いは。お芽出たう」などゝ祝辭を浴せかけたが、彼女は「否へ、恰度運好く行たからなのよ」と謙遜をして居た。

其夜父の義之助は、高子が首席で學校を卒業した悅を知らせたり、且は彼女の今後の方針に就ての相談の爲に、母の里方なる伊東邦彥を

麻布廣尾町の邸宅に訪ふた。伊東邦彦は宮内省の主馬寮の高官で、可成の財産も有て、相當に裕福に暮して居る好紳士である。母德子の實兄で、高子の爲には伯父に當るのであつた。伊東には只た一人の愛娘が有たが、五年程前に、風邪が原因で、氣管肢加答兒から肋膜を侵されて、遂に暖かい父母の手から、冷たい死の神の手にと奪ひ去られてしまつた。で其愛情は高子に遷て高子を我子の如く思ひ、彼女の喜悅は自分の喜悅、彼女の悲は同時に、我悲として非常なる同情と慈愛を彼女に注いで居るのである。

父の義之助が行た時に、伊東邦彦は折好く在宅だつた。

「やあ、今晩は。此間は失禮。追々と暖くなつて來ましたね。お變はありませんか。」

「好くお出たね。先此方へ。」

と應揚迫らぬ態度で、座布團を手づから勸めながら、

「櫻花も、もう約半分咲きましたな。」

「左樣ですね。全く早いものですね。時に姉へ樣は今晩は何所かへお外出ですか。」

「鳥渡青山の友人の妻君が病氣でなー。今晩は其を見舞に行た所ぢや。お蔭で私が留守番を仰せ付かつた譯だあはゝゝゝゝ。」

「時に兄樣、高子も愈々女學校を卒業しましたよ。」

「成績は如何だつたかなー。」

「首席だそうだが、彼れで可笑しいものですね。」

「其は偉いわい。矢張り彼の子は才器があるんぢやな。何か私も祝て遣りたいものだがなー。」

と伊東は父の義之助の悅びよりも增して喜んだ。義之助は、更に話

頭を進めて、

「所でね、兄さん、今晩は實は其高子の事で、鳥渡相談に來たのですがね。」

「相談て云のは、何か結婚問題でも起たのですかな。」

「其ならば、私には幸なんだが、然では無いのですよ。實は彼女が是非共續て學校に遣て呉れと、泣いて強請るが、何しろ御承知の通りの財政狀態で、私の手では如何しやうにも仕方がないから、困惑して居るのです。其も少し無理をすれば、絶體に遣れぬと云ふ事も無いが、其までして遣るだけの事も無いと、私は思ふのですが、如何したものでせうね。」

「そうだらうね。彼の子は學問が非常に好きらしいからな。一體何所の學校へ行きたいと、本人は言て居るのですかな。」

「女子大學の英文科へ入學したいと云ふのですが、私は遣るにしても彼の學校は如何かと考へて居るのですがね。」

「然し遣る位なら、本人の志望する所へ入れる方が好いだらうな。何しろ最早多少自意識と云ふものが出來てるのたから、側から見るよりか、本人が自分の個性や特長を最も好く知て居るだらうからな。徒に伸び樣とする芽を無暗矢鱈に摘切て自分の快樂や安樂と云ふ物の、犧牲にばかりするのが、親の務ではない。伸びるだけの力のある者は、伸ばさして遣るのが、眞に親たり、長者たるものゝ義務ぢや。兎に角其那に熱心に望で居るのなら、女子大學に入れて遣ては如何かな。經濟の方は大したものでもなし、私の家も無人で、家内も始終淋しがつてるから、少し學校へは遠いが、其位の事は、少し朝早く起きて電車で行けば好いのだから、辛棒するだら

うと思ふから、私の家に寄越して呉れゝば、全て引受けて、此所から通學さすが如何かな。然すれば、家内も話對人が出來て都合が好いがなー。」

伊東邦彦は、娘を失ふてからは、家族としては、彼と彼の妻の八重子との二人切りで、外に女中が二人と、下男一人で淋しく暮して居るのであつた。而して最早年齢は自分自身で小兒を得られるてふ時は遠い過去になつてしまつたのであるから、都合に依れば、高子を自分の養女にでもしたいと云ふ朧な希望を懷抱して居るのである。父義之助は、

「本人は自分の希望が遂げられるのだから、無論其位の事は辛棒はするでせうが、あなたに御迷惑でせう。」

「なーに、迷惑所か、反而此方ぢや賑かで好いんだ。」

「そうですか。其ならば御氣の毒ですが、御面倒を願ふことにしませうかな。嘸高子は夢中になつて喜ぶでせう。有難ふ。〳〵。」

「所がなー、高山さん、寄越すのは、二月ばかり後にして貰ひたいがなー。鳥渡支障があるんだから。」

「なーに、一期間位學校を休んだ所で、別段に何と云ふ事もあるまいと思ふですから、次の入學期の九月から寄越すことにしませう。其間に、も少し家事の方を見習はせて、此家に來た時に、幾分か手助にでもなる樣にしませう。」

「はー。では、そう云ふ事に。」

高子の全心をも暗からしめた、通學問題は、より強い大なる伯父の力と手に依て、案外に容易に、思ひも懸けず無かつた好結果に導かれることゝなつた。父は此の福音を娘に傳へたら、定めた雀躍して喜ぶだ

らう、其喜悦の姿が彼にホノ見へるばかりであつたので、早く歸て話して遣りたかつた。常例ならば四方山の話に打寛いで、裕然と談笑するのであるが、今宵は、

「鳥渡尙一ヶ所寄て歸らなければならないですから、之で失敬しませう。姉さんにも何卒宜敷く。」

と別に寄るべき所とてはなかつたが、早く歸て來たさの餘りに寄道に託て辭して行くのである。伊東は留むべき由もなく、又其那事は意にも介しなかつたので、

「そうですか。何にもお構もしないで。」

と互に別辭を交して、高山は滿月の淡い光を浴びつ、徒歩で家路を急いだ。赤坂見附上の櫻は、月光に照らされて、初春の雪解けの野原の如に所々ぽーつと白く霞んで居た。歡樂の子は洋枝片手に、詩を吟

じ、歌を詠じて、此所彼所と遊歩して居た。戀の甘きに醉へる、若き異性同志は相携へて喋々軟語花咲く樹蔭を縫ふて、漫ろ歩きに可惜浮世の快樂を盡して居た。彼の眼底には其等が如何に映じたかすたゝ〳〵と只一筋の道を我家にと辿て行た。

高子は父が斯樣な天籟の福音を齎すてふことは、夢想だもしなかつた。只竹子さんが明日來て、お父さんに都合好く話して呉れて、首尾良く承諾する樣にして來れゝば好いがと、待ち倦勞で居たのである。父はいそ〳〵と歸て來た。高子は玄關に出迎へた。

「お父樣、お歸りなさい。」

「子供達の聲がしないが、最早寢たのか。」

「えー。晝間遊び疲れたと見へて、一時間計り前に休んでしまいましたは。」

話聲に母の德子も新に出て來て、

「お歸りなさい。割合にお早ふござんしたのね。兄は居りましたですか。」

「兄さんは居たが、姉さんは青山の知人の家へ行たとかで、兄さんが留守をして居たので恰度都合が好かつた。」

「そうでございましたか。それぢや高子の事を話されたら、嘸喜ばれたでせうね。」

「大喜さ。其で、高子の事を大變に心配して呉れてね。愈々高子の希望が叶ふ樣な事になつたよ。」

と微笑ながら話して居た。側の高子は耳敏く聞付けて、其と心に悟り嬉し相な聲を上げて、

「お父さん、眞實なの。其ぢや學校に行けるんですか。あら、嬉しい

は。」

「そうだよ。」

と奥座敷の方へ歩みながら、親子三人は同じ喜悅に充たされて、快く語らいつゝ室に這入て、父は先づ靜かに腰を下して、高子に向ひ、

「だがね、高子、伯父さんの言はれるにはね、伯父さんの家も淋しい相で、彼の家に寄越して呉れゝば、全て學校の費用は出して呉れると云ふのだ。少し學校へは遠いが、彼所から通學しなければならんのだが好いか。」

「其りや、無論其位の辛棒はするは。」

「そうか、そんなら兎に角伯父さんの方へ行く事と極めよう。だが此所二月ばかりは、都合が惡い相だから、其後にして呉れてふ話だつたよ。次の學期から入學した所で、大した違もあるまいから、九

月の入學期からと云ふ事にして置いたよ。而して伯父の家へ行けば多少手助をせんけりやならんから、此家でお母さんに種々教はつて行なさい。學校の方は少し豫習をして置けば、澤山だよ。」

「私し。可成なら、竹子さんと一所に此期から入學したいと思てたんですけど。」

と高子の語には多少の曇はあつたが、希望を達し得た喜悅の感情の迸りは、彼女の顏面に蓋はれずに輝いた。

「お前、其位の事は辛棒しなければいかないよ。」

母の德子も口を重ねて、

「そうですとも。お父樣にお禮を仰言い。」

と誡める樣に窘める樣に言た。

高子は少時すると寢床に横たはつて、軈て來るべき榮ある、輝ある生

活を想像して、彼云ふ風に彼所で勉强して、彼云ふ樣になつてと、彼女の空想は、彼女の描ける空想の世界を仕掛煙火の如に驅廻つた。軈て、夢路に迚り入たが空想と夢とは交錯斷續して、孰れを夢とも分かぬ間に、夜は其黑い衣を脫ぎ棄てゝ、光明の世界と變た。高子は日光の皎々と照り輝く現實に醒めた時は茫然として居た。然ども歡喜に滿ちた彼女は力强かつた。彼女が朝の冷氣に生氣を呼吸した時は全ての疲勞をガラッと忘れた。而して朝餉を終ると、自分の爲に心を盡して呉れる、竹子の家に謝辭を述べ、一は其喜を分たんものとタッタと出懸けて行た。高子の心の何所かには、竹子の家に美夫さんが居れば、今一度會見て見たいと云ふ惹き着けられる如な明るい情緒も同時に湧起て潛んで居た。彼女は美夫との初めての會見の時に、面と向た時には口を利く事も何だか氣恥しい樣な、姿を見るの

も眼映い様な氣のした自分を解し得ず、只不審議に思て居た。高子の宅から竹子の家へは餘り遠くはなかつた。けれども其途は九十九折になつて居たが、喜悦の感情に足は浮き、思に被はれた目は電車や自働車の通るのを見ず、大通の雜音も聽かなかつた。道端の頭上に咲き競ふてた櫻花の艶な姿も目には映らず、夢から呼び醒まされた人の如に、無意識の中にばつたりと竹子の家の門前に立留まつた。而して彼女は今まで途すがら辿て來た夢路を更に續けたいてふ氣分と、自分が態々來ずとも、今日は竹子が來る筈になつて居たのをも待たずして何の爲に態々押懸けて來たかと云ふ厚顏しい態度を窘める樣な思が助けて、意識するともなく二三歩退いて小首を傾けた。其時に門内からシヤキ〳〵と小砌利を踏みしめる音がして、人の出て來るらしい氣配がしたので、意を決して門を潛た。出合頭に出て

來たのが、思がけなくも高子の心の謎の鍵の所有者なる美夫であつた。高子は閃と美夫の姿を認めた時は、電氣に觸れた樣に足は立竦む樣に感じた。彼女は俯いた儘、顏を紅らめ動悸を打たせて默禮をしつゝ玄關の方に緩かに歩を移して行た。美夫も啻默禮を以て答へて、靜かに彼女の後姿を見送た。而して彼は門外に徐々と歩み出でながら、高子の服裝は質素ではあるが、何となく調和のある、嫌味の無い風彩で、歩んで行く線の動きの優美な、而して顏の輪廓はぼーつとして、而も正しい、一見神經質らしいが、其奥には理智の閃をも蘊んでる樣な女だと心に思た。彼は此時彼女が實際に如何な性質の女だらうか知りたいと云ふ好奇心さへも惹き起したのであつた。高子は玄關で女中に案内を乞ふた。すると直に竹子は莞爾なる面を顯はして、

「高子さん好くいらしたはね。私も少し經たら行かうかと思て居た所なのよ。」

「そうー、私も家で待て居やうかと思てたのですけど、あなたに應援して貰はないでも宜い事になつたし、餘り嬉しかつたので、遂飛出して來たのよ。」

仲睦じい二人は、互に飾氣のない語ひを續けながら、竹子の後から奥の座敷の方へ高子は從て行た。竹子は、

「應援しなくても宜いとか嬉しいとか云ふのは一體如何なつたのですか。」

と竹子は友に、座布團など進めながら一刻も速に其の喜を聞かうとするのである。眞の友情ある彼等は親や骨肉も有ち得ないと思はるゝ程の、濃かな同情同感を有て居たのである。

「私も一所に學校に行ける事になつてよ。」

「其は好かつたはね。眞實に好かつたのね。私だつて嬉しくて、しやうがないは。」

と喜は何方に多いのか、其多少を知らぬ程である。高子は更に語を續けて、

「眞實に折角の御雄辯が不意になつて、定めて力拔けがしたでせうが私に免じて御免遊ばせ。おほゝゝゝ。私もあなたの強硬な外交振が、是非共拜見したかつたのに、飛んだ事になつて失望して了いましたはね。」

「全くよ。私の機鋭な外交手腕をお目に懸けたかつたのに。」

と相槌を打たりした。高子は更に調子を改めて、

「けどもね、竹子さん、今月からは入學する事は出來ないのよ。九月

の第二期からてふことになつてるのですから、其までは已を得ないから、家で豫習する積なのよ。」

「其でもあなたは好く出來るから大丈夫よ。私が學校で教科書と全體の科目を聽いて來てあげますから、其で勉强すれば大丈夫でせう。」

「有難ふ。ぢやお賴みしますよ。其でね、竹子さん、九月から入學する者は編入試驗をするのでせうかね。」

「私好くは知らないんですけど、何でも特別な科目だけ選拔して試驗するてふ話でしたよ。」

「其なら確かり勉强して置かなければ、落第でもすると、其こそ大變だはね。」

「あなたが其麼事があるものですか、けれども出來るだけした方

が得だと思ふは。」

「まだ一つ嫌なことがあるのよ。お父樣と麻布の伯父樣の都合で、麻布の伯父樣の家から通學しなければならないのよ。何でも伯父樣の家に家族が少ないので、是非私を寄越せと云ふのですつて、何しろ家族てのは伯父樣と叔母樣だけで、伯父樣が出て行くと、叔母樣ばかりで、殘は下女と下男で三人居る切りなんですから、叔母樣は全く淋しいのも無理はないのですけど。」

「でも毎日學校で會へるから宜いは。暇が有たら妾時々麻布へ遊びに行くは。」

「眞實にいらつしやいな、淋しいから。御馳走は何でもすることよ。」

「御馳走なんか如何でも、全く時々行きますは。ね高子さん、今日はあなたの嬉しい日だし。天氣が好くて、外も暖か相ですから、君子

さんを誘ふて、平河町の方から、山王さんや、辨慶橋の方へ櫻見がてら、一所に散歩しませうか。」

「でも私はあなたの家だけに行て來るつて出掛けたのですから、遲くなると、お母様が心配しますから、又此次に出直しませうよ。」

と高子は昨夜の疲れもあり、且は實際母に心配を掛けては濟まぬと思てたので一旦は辭退たのだが、竹子は如何しても承知しなかつた。

「遲くなつたら、私が一所に行て謝て上げるは。此次に云ても、もう花は散てしまうし、私も徐々學校に行く時になるは。平河町の通りも辨慶橋も恰度滿開ですつて。だから是から直に行きませうよ。」

と竹子は早くも立て奥の室に身仕度に行き懸けた樣子を見て、高子もやむを得ず、

「では仕方がありませんから、お伴をしませう。」

と應へも終らぬに、竹子は奥の室に姿を消して、母親の許を得て、嬉し相なニコ〳〵顏で出て來て、

「お待遠樣。さあ行きませう。」

と竹子が促すと、高子も徐々立て二人は玄關口から、門の外に出た。

竹子は、

「それぢや、君子さんも誘ふて行きませうね！。」

「え！。そうしませうよ。」

と二人は左も面白相に聲を機して語らいながら、君子の家に追々と近づいて行た。高子の心には又も美夫の姿が、俯と幻の如に思ひ浮んで來た。で高子は、

「美夫さん、て方は眞實に温良相な方ね。私彼那型の方が大好きだ

は。」

「全く彼の方はやさしい佳い方よ。お父様も始終賞めてるのですよ。」

と竹子は美夫を賞めては居れど、竹子には遠い親戚に當る山本幹彦と云ふ、今年帝大の法科を卒業する青年が許嫁になつて居て、美夫との間には少しも希望ある關係は無かつたのであるから彼の熊度は割合に無關心なものだつた。高子も竹子自身から聞いた事もあり、又時々二人が一所に山本の宅に立寄る事もあつたので、其關係を好く知て居た。此麼會話の中に何時の間にか高橋六郎と表札の上た、君子の家の門前に來て居た。二人は互に「あなた先へお這入なさいよ」「あなた先お先へ」と女らしい押問答を始めた後に、竹子が遂々先に門内へ這入た。而して竹子が先聲を掛けて、

「御免くださいー。」

と柔かな聲で告げると、奥の室の方で「はい」と優しい女の聲で返事をした。而してばた〳〵と誰か出て來る樣子に、二人は默て目を睜て待て居ると、軈て出て來たのは女中では無くして、君子自身だつた。君子は嬉しい樣な妙な表情をした、

「誰かと思たら、二人も揃てまあ如何したの。まあお上りなさいよ。」

「今日高子樣がいらしたものだから、あなたを誘ふて三人で一所に櫻花見がてら、山王さんから辨慶橋の方へ散歩しやうと思て來たのよ。あなたも一所に直行きませうよ。」

「私今讀書しかけて居たから、此那風をして居るのですよ。一所に行くにしても衣物を着換へなくちやならないのですから、まあ一寸お上りなさいよ。」

「行らつしやるのなら、私達は此所で待て居ますから、早く身仕度をしていらつしやいな。」

君子は竹子に言はるゝ儘に踵を廻らして奥の方へ姿を消したが、何日も見た事の無い様な派手な柄の着物に着換へて間も無く出て來た。君子は鳥渡會釋しながら、

「皆さんお待遠様、さあ參りませう。何方から行きませうか。」

洋傘を擴げながら二人に問ひ掛けた。竹子が直に、

「お濠端の方から三宅坂を上て行きませうよ。」

と應答した。二人も相應じて、「ではそうしませう」と一決して、濠端の方向にバタリ〳〵と三人は出て行た。

半藏門横通りの電車通の西側の櫻は既に滿開と云ふ時は過ぎて、そよ吹く春風にヒラ〳〵と時ならぬ吹雪を散して居た。其花瓣が青

い〳〵お濠の水の上にハラ〳〵と音もなく舞ひ落ちて行く姿が形容の出來ぬ程の美さであつた。三人は暫く低い土手の上に佇んで、其繪の様な狀景に默て見惚れて居た。向ふ側の清い綠の松林中でケーン〳〵と雉の鋭い鳴聲が、花の散り失せるのを悼む様に、惜む様に鋭く耳に響いた。希望に滿ちて春未だ早い彼等は、消へ散る花には、眞の同情も同感も有ち得なかつた。人は落寞して始て、夕に喘く眞の蟲の音を聞き、朝に散る花の心をも知る事が出來る。逆境の恩潮など云ふものありとし得べくんば、之等を以て充て箝めるべき語であろうと思ふ。而して彼等うら若い女性は只花の舞ひ散る表面の運動の美を見る而已である。高子は、

「此所の櫻花は既滿開は過ぎてるのね。其はそうと今向で大きな凄い聲で鳴いたのは何でせうかね。」

と不審の眉を顰める。吾子が物知顔をして、

「あれを知らないの、まあ。あれは雉よ。私が朝此所を通ると、何時も大きな聲で鳴いてるは。」

と説明すると、高子は驚いた樣な面容で、

「私雉の鳴聲てふのは、初めて聞いたは。凄い聲ね。」

「私も初めてだは。全く大きな聲ですはね。」

と竹子も揃て安心したと云ふ風に語た。君子は二人を促して、

「又徐々〳〵行きませうよ。」

と歩を移し始める。二人も續いた。電車の交叉點の所まで來ると斷崖數丈の下に底知れぬ樣な青い〳〵水が小波を立てゝ水禽を浮べて漂ふて居た。鴛鴦や鴨は天上の樂園に遊でる樣に面白相に穩かな水面をスル〳〵と泳いで居た。向岸の汀に一本の大木が柔か

な新芽を吹いて枝振面白く擴がつて居た。其を上から見下すと何とも云へない快い柔かい感じがした。此方の堤には新綠滴る青柳の糸が春霞に打けぶつて見渡す限りに續いて居た。時々白鷺が鏡の樣な水面に眞白な姿を映しつゝ飛交ふたり、大木の梢に止まつたりして居た。燕は滴る青柳の絲を潛ては快活相にスーツ〳〵と飛び廻て居たりする有樣を堤の上から望めると、一幅の名畫よりも美麗で自然の律動が流出る如だつた。高子は堤に上て、其上を辿りながら、

「私此の上から櫻田門や大審院の方を見渡した景色が、東京中で一番好きだは。」

「全く雄大な莊嚴な、色の配合の好い所ですね。」

と君子は例の能辯を發揮した。竹子も、

「此所から見ると、司法省や大審院の赤い煉瓦建までが、調和を破らないで美麗に見えますはね。」

斯した話に電車の轟音さへ耳には聽へず、三宅坂まで來た。竹子は赤坂見附の學習院の方を指しながら、

「此所から上の方へ曲て行くんでせう。」

二人は「そうよ」と同時に答へて堤を下りて平河町の電車通りの坂を見上げると其所の山櫻は未だ半開だつた。往來の人は仰向勝に通て行た。自動車上の人も、電車中の人も窓から瞰で通た。生きとし活けるものは、これは〳〵とばかりに歌心になつて、彼等には浮世は歡樂の花園に化したかの樣に思はれる如に見えた。君子は、

「此所のも、もう大概咲きましたのね。」

「此所のは八重櫻だから、少し遲いは。」

と高子は上向いて言た。三人は後になり亦前になつたりして、平河町の通りを過ぎて、赤坂見附の上に出た。竹子は先頭に立て學習院の横手の坂をタッタ〳〵と下て、永田町の方から山王前の公番所の前まで默々として出て來た。其所に來ると又高子が先達になつて、

「此所から上て行きませうよ。」

彼方には大な蟲々たる楠や杉木立の鬱蒼とした森、其下蔭には青々とした八ッ手や裏白や名も知れぬ種々の雜草が萠へ立つばかりに、生へ茂て居て、如何にも神錆びて見える其間を潜る廣い神路は、青苔の着いた奇麗な小砂利を敷き詰めて、掃除も行屆いて、如何にも神嚴幽暗に見える頽な傾斜をした坂路を三人は靜かに徐々と登て行く。

君子は竹子を見返りながら、

「妾此所から下を見た所が大好きですよ。何となく深林の中に包

まれてる樣な氣分がすることよ。」

「そうね。妾も東京中で上野よりも、芝公園よりも、此山王さんが一等好きだは。」

と竹子も此森の神秘さ爽快さを評した。三人の森の精の如な若い女性は此神秘な綠の森に吸ひ込まれていた。彼等は赤い神門を潜て本堂の前に詣でて、殊勝らしくも叩頭いた。而して互に顏を見合せた。

「何所かで休息で行きませうか。」

と竹子が先主唱した。二人は「そうね」と答へて邊を見廻した溜池に面してる側の二三軒の掛茶屋には、涼臺に赤い毛布を敷いて、客待ち面の赤前垂の女中や、腰に梓の弓張れる老女さんが、「休んでいらつしやい」「まあお休みになつていらつしやい」と黃ろい聲と、皺枯れ聲で交

々客を呼んで居た。其中の一軒に、五色だんご、と立看板の出て居る家を見附けて、君子は、

「彼所に行て、おだんごでも食べて行きませうよ。」

と二人を見反りながら徐々と歩み寄た。高子だけは稍躊躇してた樣だつたが、二人の後に默然として從て行つた。茶屋の老女さんは拔からず、「奥の方へいらつしやい」と云ふのを遮て「此所で宜いは」と表に出て居た赤毛布の敷いた臺の上に腰を下して、君子は、

「おばさん、おだんごを頂戴な。」

「はい只今。まあお茶を一つ召上てくださいませ。」

と愛憎好く澁茶を進た。而して直に青いのや赤いの、白いのと混つたのを、皿に盛り上げて運で來た。

「お待遠樣。さあ何卒召上つてくださいませ。」

と皿を盆から腰掛にと移した。

「御散歩でございますか。」

と老女は皺の寄た顔を伸ばしながら抜殘りの黑い齒を露した

「え！。花見がてら、お詣りに來たんですよ。何日も此山は閑靜で奇麗で宜うございますね。斯麼所で年中住で居たら命が延々するでせうね。」

と君子が話すと、老女は、

「其はまあ宜くお詣りなさゐました。別に奇麗と云ふ程でもありませんが、寂かな事は眞實に靜かでございますよ。又時々お出懸けくださいませ。」

竹子も老女に向ひ更に話し掛けてた。

「夏なんか全く涼しいでせうね。」

「はい〳〵夕方なぞは其れは〳〵涼しうございますよ。何卒又涼みに來らしてくださいませ。」

と老女さん愈々拔目が無い。高子は俯と思ひ出した樣に語を挿んで、

「妾去年の夏、月夜の晩にお父樣と妹と三人で此山に來た時に、彼所のベンチに腰掛けて、二人の人が尺八の合奏して居たのよ。其が森の靜寂な空氣に鳴り響いて、幽暗な森の空氣が律を作て搖り動く樣に思はれる程好くて、忘れられないは。私達が餘り近くに寄て行たものだから、已めてしまつたのだけど、其時の響が印象して、今でも耳に聽へる樣な氣持がするは。」

と目を細くして彼方のベンチに振向いて話した。竹子は、

「でも此所は木が深山あるから、蚊が隨分出て來るでせうね。尺八

なんか吹いてたら餘計蚊が集て來るでせう。」

と夢幻境から俗社會の現實に引下す樣な話に移した。此麼會話が眞の彼等二人の性格の迸であつて、二人の生涯を暗示する神秘な運命を導く語であらう。高子は又答て、

「其割合には居ないのよ。少しは居ましたけども。」

斯した三人の女の話は姦しくも際限もなく續いた。

君子は森の大木を透して空の太陽を窺いて、

「もう大分時間が過た樣ですから、徐々行きませうか。」

「え！。妾も餘り遲くなると困るから行きませう。」

と高子が應じた。竹子は老女さんに向ひ、

「お幾程ですか。おばさん。」

と聞いた。老女さんは愛嬌好く、

「まあ御悠然と休んでいらつしやいまし。皆で二十五錢でございます。えへゝゝゝ。」

と小氣味の惡る相な微笑やら媚を見せた。竹子は小さな赤い墓口から十錢銀貨三枚を摘み出して、

「お代は玆に置きますよ。」

と立て行た。老女さんは彼等の後姿を見送て、

「お粗末樣、毎度どうも有難ふございました。又何卒ぞお願申します。お靜かに。」

稅金の掛らぬお世辭をたつぷりと浴せ掛けた。三人は樹立深い幽邃の氣の迫て來る段々坂をトツ〳〵と下り、明るい電車道に沿ふて赤坂見附から辨慶橋の上に來た。高子は、

「妾此橋の邊も大好きよ。見附の所から此橋の方を見ると、何とな

く江戸時代の面影が聯想される樣な氣がして、奥深しい樣に思はれてしやうがないは。」

「全くね。此橋の邊が東京中で、一番江戸時代の面影が好く殘てる樣に思ひますはね。」

竹子が附加へた。君子も、

「そう云へば全く其那氣持がするのね。眞實にねー。眞白の花が薄黑い濠を背景に浮出してるのは何とも云へませんね。……是から序に大久保公園に行きませうか。」

意氣が投合すると云ふのか、附和雷同と言ふのか、斯して一人が發言する時は、多くの場合に他の二人は賛しない事は無い。二人は「さあ」と答へて、君子の後を追ふて行た。而して三人は公園に這入て、ベンチに列で腰掛けた。竹子は、

「此所も餘り澤山人が來なくてシーンとして居て好のね。」

と云ふと、君子は二人を見較べる樣に見ながら、

「眞實に鳥渡好いはね。其はそうと、是からは毎日あなたがたに會へない樣になるのね。そう思ふと矢張り今までの學校が憧かしくなるはね、あなたがたは女子大學の方へ行らつしやるんですつてね。其で卒業してからは如何なさるお積りなの。」

と意味有り氣に質問の矢を放た。高子が直に答へて、

「妾には之と云ふ確固した考はありませんけれど、竹子さんは卒業したら、直に山本さんの所へ嫁入して、山本法學士夫人におなりになるんでせう、ねー竹子さんそうでせう。」

「あら、嫌だは、高子さんは。」

と竹子は少しく氣恥し相な表情をして見せた。高子は、

「嫌だつて、眞實ぢやありませんか。」

と疊み掛けて置いて、更に君子に向かつて、

「君子さん、あなたは高等師範に行らつしやるてんですが、卒業した ら如何するお考なの。」

「妾は差當り女學校の敎員にでもなる積で居るのです。實際今の日本の女子敎育と云ふものが妾には物足りない樣な氣がしてならないのよ。第一女子を敎育するのに男子が之を敎へるなんて云ふのは不權識な誤だと思ふは。女子は女敎師に依て敎導して行かれなければならぬものだと、妾は信じて居るのです。今の日本の狀態では全々男子の敎員を驅逐して女敎員が代て敎育するてふ事は、不可能かも知れませんが、今の所では中等乃至中等以上の女子敎育に男子の權威が强過ぎ又多過ぎると思ふは。一體日

本の社會が良妻賢母主義など云て、女子の高等敎育を歎迎せず、高等敎育は男子の占有物の樣に考へてるのが間違だと思ふは。だから結局は其目的とする良妻賢母ですら得られない譯になるのよ。相當の智見もなく啻良妻〳〵と、男子の機嫌ばかり取たり、玩弄物になつて甘じて、男子に見て貰はんが爲に而已めそ〳〵して居る女は大嫌いだは。女子も國家多事の秋、男子が戰場に出征して國內には老幼や婦女ばかり殘された場合には、國內の產業とか交通を如何します。如何强い軍隊でも兵糧が無くては戰爭は不可能ではありませんか。獨逸、佛蘭西、英國、米國邊の婦人は盛に種々の方面に活躍して居る相です。だから男子が居なくとも汽車が走らぬ、電車が動かぬ、パンが出來ぬてふ事は無い相です。學問だつても向では女子が、ドクトルやマスターの學位を持て居るの

は少しも珍らしくは無い相ですよ。日本では東北大學から女子の理學士が一人出たとか何とか云ふと、新聞に大きく書き立てる位に、稀なのです。之は日本の社會の制度も惡く、社會の罪も大きいので全く社會の責任の樣ですが、女子の方でも只安閑として居ないで、も少し根本的に考へて努力して、女子教育の開放の叫聲を高めなくちやならないと思ひますよ。之が妾の理想と希望なのですよ。あなたがたは如何なお考へ。」

と婦人雜誌や新聞の論說の斷片を集めたものを眞面目に、例の雄辯に任せて熱舌を振た。高子と竹子の二人は、花見の興も醒め果てゝ、呆氣に取られた樣な顏をして、聲を潛めて聞いて居た。高子は興の乘らぬ如な調子で穩かに斯ふ言た。

「妾なんか、別段に其那大理想も希望も有ていないは。又力も無い

と思てるのよ。けども只世の中の人間の生活の波亂も、自然の曲折も皆美しい意味のあるものと解釋して、其の意味を深く感じ、其美しい聲を心から聞味はい、清純な同情を以て、世の中を興樂して行きたいと思ふばかりだは。」

君子が外部の社會の顯現して居る所に自己の理想の天地を建設して行かうと欲して居るに反し、高子は內面的に精神的に全てのものを自己に反映して同情同感して、其中に生き樂んで行きたいと云ふのである。竹子は又此二人と全々行き方を異にして居るのである。

「妾はあなた方の樣な考へには如何してもなれないんです。女と云ふものは結婚をして、善良な家庭を作て、健全な子供を育てゝ行くのが、國家に對する義務であり、社會に對する女の天職だと思てるは。だから學問でも其が爲に必要なだけの學問さへして置け

ば宜いと思てるは。」

と竹子の云ふ所は全く世間並な女の思想を現して居る。全く彼女だけは親に仕へては所謂孝、夫に侍しては所謂貞操で而も默從ですらも甘ずるてふ性質の溫和な女子らしく容貌其ものにも圭角のない、愛嬌の豐な面容に、柔和らしい擧動に其性質は好く現はれて居る。君子は更に竹子の考を打破らんものと、彼女に向ひ、

「其健全な子供を育んで行くにしても……。」

と所謂自分の理想を撤底せしめんと、口を尖らして斯ふ說き始めた所に四人連の書生風の男が直憐のベンチに腰掛けて「ヨー〳〵」とか「チエスト」とか「大きな聲で彌次り始めたので、三人は逃ぐるが如く、默て後を振向きながら、門外に歩て來た。君子は憾し相な眼付で、

「日本の男子は全く野蠻だはね。女と見たら直ぐ調戯ふ事ばかり

考へてるのですね。」

と外國からでも來た樣に囁いた。高子は二人を促して、

「もう歸りませうよ。妾餘り遲くなるといけないから。」

君子と竹子の二人も「それぢやもう歸りませうよ。仕方がありませんから」と元來た道を見附の所まで出て來た。竹子は、

「此所から電車に乘りませうよ。」

「えー。そうしませう。」

と高子も停留所に共に立止つた。君子は、

「妾徒歩て歸るは。一寸赤坂の叔母さんの家に寄て行きますから。」

二人は九段兩國行の電車が來たので「左樣なら」と君子と袖を別つて電車の客となつた。

三

其後例の日曜學校の運動會の日取になつたので、豫定せられた如に會は高田の馬場で催された。けれども高子は友達が來訪する事になつて居ると斷つて、運動會には母と二人の弟と妹を行かしめて自分は留守番に託けて自宅に一人殘て居た。彼女は無邪氣な子供達の遊ぶのを見る事を好まぬ程陰鬱な性質ではない、又年頃の娘として人前に出るのを厭ふ程不活潑な女と云ふでも無かつた。然ども菅野と云ふ男が街氣たつぷりで、萬事を切り廻さんが爲に切廻して居るのを見るのが、何となく氣が塞がり相に厭だつたのである。其でも菅野の方では高山牧師の姿が會場に見へると、高子も共に來るものと心窃かに待倦んで居た。牧師の夫妻は來た。二人の子供も來た。けれども高子は影も姿も見せなかつた。菅野は自分の期待を裏切られて、中心失望と落膽の黒い思が流れて居たものゝ何もの

かの邪氣に捉はれてた彼は躊躇して強て高子の來なかつた理由を問ひも得せず、只心の中に訝かつて居た。而も外面は例の氣取た風姿に平氣な毛關心な態度を裝ふて居た。本人の心事に立入て見れば憐むべき、傷ましい所が無いではないが、客觀的に其心情を憶測して見れば、寧ろそうして居る事が更に氣障の氣障たる所で唾棄したくなる位にも思はれる。彼は何日も必ず斯した時には出て來る高子が今日に限て來ないばかりか、彼女の近來の態度も何となく俯に落ちぬ樣な節もあると、嫉妬の心を廻らし始めた。而して「此麼事では駄目である。も少し敏い接近策を講じなければならぬ」と彼は心の中に窃に叩頭いた樣子だつた。彼は高子の父や母などの口吻では、高子は將來自分の占有する所のものである、妻であると而已思ひ込で居たのであつた。其所へ來會はした牧師は家族を伴ふて菅野

に近づいて行て、「菅野君、どうも種々御苦勞樣」と悠揚と挨拶を述べた。菅野は例の好言色を作して、「先生、如何も餘り甘くは參りませんでして」と頭を搔きながら、更に二人の子供に向ひ、「正ちやんも、操さんも今日の競技に一等をお取りなさい。私が應援して上げますからね。」とお世辭を振撒いたのも憐れに見へた。運動會は幼稚園の生徒のするのと、殆ど異る所は無かつた。而して正之進も操も相當の賞品を得て喜で居た。子供の組の競技が終ると來賓競爭と云ふのがあつた。日頃鹿爪らしい顏をして府廳に務めてる高級官吏を氣取てる、德野と云ふ男も雞の如に尻尾を振り〳〵走て居た。又苦虫の一升も嚙み潰した如な面をして、僕が日本の豪商だ、とばかりピーンとカイゼル髭氣取の馬場と云ふ男も共に加て居た。日頃謹嚴莊重な牧師までが、今日は大童宜敷の體裁で一所に走ると云ふ譯で、子供等

は手を痛くするまで拍手して喜んだ。來賓中の婦人の方の提灯競走もあつた。丸々肥へ太た、縱に走るよりは、横に轉した方が速相に見へる老女、手巾を口に當てゝ氣取り込だ某々夫人、小學校教員の何々お轉婆女史が斯麼競技こそは妾の領分でございと言はぬばかりに外眦を鉤り上げて雄々しくぞ立出た姿、勇しくも可笑しかつた。日頃青い憂鬱な面をして居る、東條豐と云ふ子供までが腹を抱へ手を拍て、笑い崩れて居た。午後の六時と云ふ黄昏時に會は全く終つた。同じ信仰に生きてる神の子等は、自然の垂れた黑い夕の神秘な幕中に包まれて、丹溶き流せる夕照の形面白い雲を仰ぎ、瞬く宵の明星の輝を戴きつゝ現世の幽鬱なる自が棲家を志して疲れた足を勵ました。歸路に母と共に今日の勝利を喜ぶ小兒あり、亦獨り敗者の憂き思を熟々と味ふもあつた。此所にも人世の離れ難い悲慘は横

はり深い哲理は潜んで居た。電車に共に乘り込んだものは、彼方で一人を減じ、此所で更に二人を散じて、牧師と共に乘て歸る者は、彼の家族と菅野とだけになつた。電車から下りて皆歩み出すと、菅野は先づ子供達に向ひ、

「正ちやんも、操さんも好く走りましたね。疲勞たでせう。手を引いてあげませう。」

と優しく賞め煽動てゝ、操の手を執た。子供は各々有りし記憶から聯想の緒を操り出して、正之進は先に、

「僕、何日でも運動會の時は學校だつても、一等なんだよ。」

と誇り面に言ふと、操も又負けず、

「あたしだつても、何日でも勝つのよ。」

と成人は同情ある人の前に悲慘哀感の情を訴へて發散せんと思ふ

ものであるが、小供は之に反して同情ありと信じた人の前には多く自己の喜びの感情の印象而已を辿らんとするものである。牧師は菅野に向ひ慰謝の辭を發して、

「菅野君は今日は隨分骨が折れただらう。早く家に歸て休み給へ。と勞を稿ふた。德子も同感で、

「そうですね。彼那に驅馳なすては草臥れたでせうね。」

と、勞はる樣に優しい聲で言ふた。菅野は斯した場合には、常日も空元氣を見せるのである。其所にも彼の街氣はあつた。

「なーに、彼位の事は何でもありませんよ。青年ですもの。會社に居れば未少し働きますよ　然し奥さんは眞にお疲勞になつたでせう終まで立ち續けて居らしたから。」

「そうでもありませんでしたよ。」

と德子は簡單に答へた。菅野は話が途切れたの幸、更に思ひも忘れぬ高子の話に遷した。

「高子さんは遂々女學校の方は卒業なさつた相ですが、之から先は如何なさるのですか。」

と自分の思ふ答を得た相な口調で問ひかけた。高山牧師は其眞意を解しない樣に無關心に斯話した。

「彼女も僕の經濟が許さん！。既年頃でもあるのだから、暫時の間家事の實習の傍、音樂でも少し稽古さして、結婚をさせやうと思てたのだが、如何しても承知しないで是非も少し勉强がしたいから、麻布の伯父さんにでも相談して、女子大學の方へ入れて呉ろとて泣いて賴ものだから、已を得ず麻布まで相談に行た所が、彼女の成績が好かつたものだから、非常に同情して呉て、伯父の家から通學

をさして呉る樣になつたよ。其で彼女も雀躍して喜んでるよ。」

「はーそうですか。けども家庭の主婦としては、其那に深い學問なんか無くとも、子供を育てゝ行くだけの教育さへあれば充分と思ひますがね。實際人の妻としては女學校を卒業して居れば澤山でせうか、女子大學までお入學になりたいと云ふのは、何か外に目的を持て居らつしやるのでせうね。」

と菅野は高子は最早將來自分の妻の如くに確信して居たのであるから、其立場から彼女の進退を計量して、自己の心算に適中しない彼女の行動が怪訝に堪へないのであつた。牧師として人の靈魂精神を牧し父として其子の性癖の悉くを知てると思はるゝ者も、一旦其血を分ら單獨なる形を具へて、獨立なる肉體と精神內容とを有する一人格の殿堂深く潛んで居る、不思議な精神の働は到底知ることは

出來ない。電精神的經驗より得る範疇に依て、恰も氣象學者が氣壓や風速を計量して、天候を推測する樣に、日常の行爲や、擧止とか精神徵候を綜合して變化てふ形式に現はれたるものを以て、判斷をして行くの外は無いのである。だから常に傍に居て急激な變化を見ない親から見た其子は、腰骨の窟曲した老齡になつても、襁褓を當てた綠子を想ふものである　で父の高山は、

「彼女は年は追々取て來るが、未だまるで小供だね。だから別に之てふ確固した目的も何もあるのでは無いが、友達が行くてふものだから自分も行きたいと云ふのだらうと思ふよ。まあ行きたいと云ふのだから、行ける所まで遣る積だが、もう徐々結婚の事も考へてやらなけりやならない。彼女は如何も宗教家の如な餘り地味な靜かな生活は好かぬらしいし、其で商人の如な搔擾しい暮し

向も嫌いらしいから、官吏か會社員の如な薩張した、小奇麗な家庭が好きらしいね。君だつても、如何せ早晩妻帶をするのだらうから、我儘な所は少し辛棒して、將來高子の面倒を見て遣て呉れると好いがな。其とも外に既に極た娘でもあるかね。」

と牧師は高子の父として獨りで我天して居るらしいのである。母の德子は女性として、自己の經驗から得た精察や同情から來た人情を穿た語として愼だ調子で斯言足した。

「全く菅野さんだと氣心も好く判明て居て眞實に好いのですが、斯云ふ事は一生涯の大問題ですから、お互に本人同志が快諾しなければならないと思ひますから、一應高子にも好く尋ねて見なければ、ね菅野さん。」

「そうですね。私も早晩妻帶して家庭を持ちたいと思ふては居ま

すが、何しろ未だ養て行くだけの能力がないのですからね。」

と菅野は徐々と彼の心の底に蟠てた本音を吹き始めた。牧師は更に敎へる樣な心持で、

「なーに、養て行くと言た所で別に一人位增た所で別に經濟上の異はないものだよ。獨身で居ると用も無い友人等が澤山來るが、妻帶すると其麼のが少くなるから、自然交際費などが減て行くし又女と云ふものは、割合に約しいものだから、殆ど違は無からう。」

と渴した口に淸水を與へられる如な牧師の甘い語に彼は心中溶ける如な穩かならぬ喜悅を感じて居たが、眞逆の場合の醜態をも考へて、此の喜を語に表すには、彼は餘り狡猾であつた。而して彼菅野は更に徐々口を開いて、

「そうでせうが、未だ全く早過ぎる樣に思ひます。」

と答へて居た。彼の其時の心情は下からは手を出して、上では、頭を振て居る奇妙な形である。然ども牧師も彼の心意は略推知して居た。而して徐に、

「先あ〳〵此那問題だから、好く考へて置き給へ。」

と言放つた。其時に早や牧師の家と菅野の家との岐路まで歩て來て居た。すると互に「お休み」「では左樣なら」と振別れて歸た。菅野は今宵の牧師の話が自分の希望と豫想に益々接近して來たので、中心押へ切れぬ喜悅に滿ちて晝間の疲勞も打忘れて雀躍して得意の足を自が家に輕く運んで行くのであつた。

其後二週間目の日曜日に、高子の宅に君子が訪れて來た。而して君子は高子に高等師範の入學試驗の模樣を物語て、「割合に入學試驗は容易しかつたけど、英語が比較的にむづかしかつたは。でもまあ五

番で無事に通過したは。」と得意になつて話した。而して彼女はより高等の學校の生徒となつた、新しい誇を以て、新に入學した學校の校風や教師達の性癖などを細やかに手眞似や表情やで物語た。其次の土曜日の午後竹子も來た。而して同じ様に種々の物語を始めた。

「試驗は思た程六ヶ敷はなかつたんですけど、試驗の監督は意外に嚴重でしたよ。監督の教師が一室に三人も來て居ましたよ。」

と竹子は今も眼底に映る教室の光景を思ひ浮べる如な眼相をして話した。すると高子は直に其結果を尋ねたくなつて、

「そうー。其で試驗の結果は如何でしたか。」

「餘り甘くは出來なかつたと思たのですが、三番で通過しましたよ。意外でしたよ。」

「其はまあお目出度ふ。」

「あらー改まつて、嫌だは。」

「其で澤山入學しましたか。」

「えー。大分澤山入學した様ですよ。何でも私の方の家政科には百人位入學した相ですよ。英文科の方へ入學した方が言てましたがね、何でも英語の會話なんか割合に嚴格に試驗する相ですよ。何でも教師が讀み上げて書取りをするのと、一つの質問を出して自分が思ふ通りの答案を書くのがある相です。兎に角耳に馴れてない者は損ですつて。何でも今度の入學試驗に狼狽いた方が、大分あつたてふ話でしたよ。だから若し都合か付いたら、入學前に何所かの西洋人の所へ教はりに行た方が得だと思ふは。」

と竹子は親友であり、又時に益友ともなつた。高子は一寸小首を傾

けて思案をして

「有難ふ。妾お父様に話して、何所か好い所に遣て貰ふは。何所か好い所を知らなくつて。」

と高子は尋ねた。竹子も俯て少し考へて、

「妾も好くは知りませんけど、築地にミス、スプリングと云ふ婦人が教へて居る相です。何だか中々評判が好い相ですよ。」

「そうですか。兎に角お父様と相談するは。有難ふ。其はそうと此間の君子さんの議論は如何です。全く矢島楫子さんも其方のけでしたはね。」

「そうね。全く驚愕して膽を潰しましたのね。彼の方は何日も學者めいた事ばかり言ていらつしやるのね。」

と相槌を打た。高子は話頭を轉じて、

「全くそうね。其はそうと、彼の！。美夫さんは此頃如何して居らつしやるんです。」

と思ひ浮で來たので、極り悪る相に斯尋ねた。而して高子は何とはなしに美夫の音便が聞き度いのであつた。

「別に如何すると云ふ事もありませんよ。つい此間學校が始まつたので、矢張り通學していらつしやるは。」

竹子は毛頭邪氣も憶測もない樣に答へた。高子は、

「お歸りになつたら宜敷言て頂戴な。」

と言たが、友ではあるが、物思ふ心の氣恥しさに少し頰を赤らめた。

竹子は高子から教科書を調べて呉れと頼まれた事を俯と思出したので、

「えー、そう言ひますは。そう〳〵あなたから教科書の事を頼まれ

て居た事をすつかり忘れてしまつて居たは。ご免なさいな。二三日の中に必ず知らせますから、其は然と妾學科の復習を少しする事があるから、もう歸りますは。好いでせう。」

「も少し悠くり遊で居らつしやいな。」

と高子は語尾長く引張た聲を出して引留めたが、竹子は止まる樣子もなく、腰を伸して、高子の顏を窺き込み、

「でも餘り遲くなるから、もう歸りますは。而して又來ますは。如何せ敎科書を知らせに、二三日の中に來なければなりませんもの。」

と强て立ち出でんとする氣勢に、高子も已を得ず、

「其ぢや左樣なら。又いらつしやいな。賴みますよ。敎科書の事を。」

と二人は別離をした。

其翌日高子は、母に事の次第を話して許を得んとしたが、母はそれぢやお父樣の知た方で、亞米利加の宣敎師の奧さんだつた、今は未亡人になつてる、ミセス、スミスと云ふ方が敎へて居らつしやる相だから、お父樣にお願して其所へでも行らつしやいと父に話す樣に命ぜられた。高子は父に話をするのが何とはなしに、煙たい樣な感がするので、高子は更に母に向て、

「お母さんから賴でくださいな。」

と母に折返して賴で見たが、母は肯はず、高子の氣を鞭達する樣に、

「其那事位は、自分でお賴なさい。」

と怒られたので、漸く氣を勵ましたが、尙澁々怖々と父の居た書齋に這入て行て、高子は、

「お父樣、今日ね、竹子さんがいらしてね、女子大學は英語の會話が中

々六ケ敷て、嚴重だそうですから、是非多少準備して行く方が、好つて言て呉れましたのですが、九月までに是非少し習て置きたいと思つてるんですが、お父様の知ていらつしやる西洋人の方がある相ですが、其所へでも遣てくださいな。」

父は机の上から高子の方へ視線を投げ移して、

「そうか。でも女なんか英語の會話なんぞ餘り必要が無さ相に思ふがな！。」

「でも中々嚴重にやるんですつて。だから是非共遣つくださいな。頼みますは。」

と高子は強請た。父も已を得ず首を振り〳〵考へて、

「仕方がないな。甲乙と、何所が好いかな！。そう〳〵、ミセス、スミスが此頃英語を敎へてると云ふ話だ。それぢやね、ミセス、スミス

と云ふ婦人が六番町で英語の私熟を開いてると云ふ話だつたから、彼の方にそう云つてお出なさい。ミセス、スミスと云ふ人は、スミス博士の妻君で、中々敎育もあるらしい人だから、宜いだらうと思ふな！。私が先に話しといて遣るから。」

「何日話してくださいますか。お父さん。」

と高子が念を押した。父は一寸指など繰て見て、

「そうだね。次の金曜日あたりに逢ふだらうと思ふから、其時まで待て呉れ。」

「ぢや吃度よ。私來々週の日曜日から行てよ。宜うございますか。」

「宜し——。話して置かう。」

「お父様、何卒頼みますよ。」

と案するより產むが安いとか、高子は喜で座を去た。遲く而も早く

時は過ぎた。而してミセス、スミスの家に訪問すべき日は、今日となつた。女性としては比較的に物事に頓着をしない娘も矢張り女は女だつた。「どんな衣物を著て行うか、西洋人の家に行たら如何云はふか、ミセス、スミスと云ふ人は如何な容貌の婦人で如何な態度で迎へるだらうか」高子は千々に思を碎いて見た。全く世事に馴れぬ恐怖心と、新なる人に逢ふてふ好奇心とは彼女の心を蓋ふた。之が若き人々の有する清澄なる血と、純新なる精神の尊い賜であつて、此の態度と氣分は何日までも持續けて、記憶して行くべきであらう。高子は女學生らしく、矢絣の衣物に紫紺色の袴を附けて、靴を穿いて出懸けた。而して六番町の坂の下の所まで來て、角に佇んで居た車夫に番地を話して尋ねた。車夫は此邊に西洋人は珍らしいので好く知て居ると見へ、直に首肯いて、坂の上を指して、「其は此坂を登り詰め

た所の左側の二階建の家です」と敎へた。上の方を見ると西洋人だから定めし西洋館にでも住て居ると思たが、純日本建の家ばかりであるから、少々不思議に心には思たが、平然として「では彼の門構の日本建ですね」と問ひ反した。車屋は別段何の感も無かつかものと見へて、只「そうですよ」と而已答へた。成程其門前に行て見ると古びた板の木目に墨流れのした木札に假名で、ミセス、スミスと書いてあつた。而して其の上に小さなスクリプト體でMrs. Smithと書いてあつた。此所に相違ないと、門の僣り戸を引張て見たが、戸締がしてある樣子、「おや留守かしら」獨語の樣に言ひながら、其上を見上げると鈴の釦が目に付いた。鈴を押して這入て行くのも餘り業々しい仕方であるとは思て見たが、何等の這入るべき方便も無かつたので、已を得ず思切て、鈴の釦を押した。

すると六十格好の召使らしい日本人の老女が姿を現はして「何方ですか」と聞いた。「私は高山高子と申します者ですが、スミス先生は居らつしやいますか」と高子は寂かに話した。此物音に格子戸の内側から、十二三の紺の詰襟服に、半洋袴に黒の長靴足袋を穿いた、頭髪の赤い、眼の玉の青い、鼻の尖た、顔に茶滓のある男の子が出て來て「あなただれ！」と尋ねた。高子ははゝあ、之がスミスの子だなと頷いて「私は高山と云ふ者ですが、先生はお出ですか」と反問すると、彼は「えー居りましゆ」と答へつゝ奥の方へ引込で行た。此度は代て鼻眼鏡を掛けた、痩體な、表情は若くはあるが、既に顔面から首筋に小皺の波打た、人生五十年の坂も越しつらんと思はれる、西洋婦人が、黒の袴に白い寒冷紗の上衣を著て、足にはスリパーを突掛けて出て來た。語には英語訛こそあれ、きび〳〵した聲で「あなたミス、高山ですか。私スミ

スでしゆ。まあお上りなしやい」と言はるゝまゝに靴を脱いで座敷に上て行た。高子は又改まつて、

「妾は高山高子と申す者でございますが、何卒宜敷お願申します。」と初對面の挨拶を述べた。すると ミセス、スミスは如才なく「Take seat」と云て更に日本語で「お掛なしやい」と言ひ直して側の椅子を進めた。家の構造は日本建ではあるが、内部の裝飾萬端はさすがは洋風であつた。床の疊の上に絨氈を敷き詰めて、其眞中に六角の卓子を据へ、周圍に五六脚の椅子と、一脚の長椅子が列べてあつた。床の間には顎髭を生した西洋人の溫和な學者らしい容貌の寫眞が金塗の額縁に箝めたのが掛かつて居た。之が祖國遠く離れ來て、其身を櫻花咲匂ふ極東帝國の土に葬た、此家の亡き主人スミス博士だなと了解せられた。違へ棚から座敷の書架には百科全書

や金文字の洋書が何百となく所狹いばかりに列で居た。媚間には水彩の山水畫や油繪の額が掛かつて居た。高子は身の置き場所に困るてふ風をして立て居たが、スミス夫人の言葉に從ふて、「はい有難ふございます」と、顏に薄紅を散して、落着かぬ腰を下した。而して語を更めて靜に、

「お父樣からお願をして置いた筈でございますが、妾は英語の會話を少し敎へて戴きたいと思ふのですが。」

「Yes. Yes 判て居ります。汝、お父樣昨日お話ありました。何日からでもお出なしやい。」

「では明日からでもお願したいのですが、何時から參りましたら宜敷うございませうか。」

「明日は生憎都合惡いですから、明後日から、お出なしやい。私神田

の學校に敎に行きます。而して何日でも火曜日、遲くなりますから、此所で敎へませんでしゆから、火曜日と日曜日は休みましゆ。其他の日は祭日だけか休みませんから、毎日お出なさい。時間は午後三時から五時の間何時でも構いませんから、何時からでも其間に來れば宜敷しいでしゆ。」

ミセス、スミスは夫博士の存命中は裕福とまでは行かずとも、自分自身が働いて糧の代を助けて行かずとも、主婦として小兒の面倒やクツクの監督位をして居れば、相當の生活を營んで尙多少の貯蓄も出來て居たのであるが、八年以前に礎とも柱とも賴む夫が二人の小兒を遺して、冥界遙に去られた後は中々並々ならぬ努力に月日を過して居るのである。夫の沒した時の彼女は昏倒せんばかりの悲歎で熟々と異境に土の如に冷たい寂寞なる感情を味ふた。所が貯蓄は

日を追ふて減じて行く、生活の費用は間斷なく要るので、止めも敢へぬ涙を强て押し止めて、日頃交際ある人たちや、亡き夫の友人等に何かの方法もかなと、相談をして見た。彼女の一人の女友達にミス、サンマースと云ふ英語教師をして居る人があつて、彼女はスミスに「此間神田の正則英語學院から、妾に會話を教へに來て呉れと言て來ましたが、今行てる學校の時間と生憎衝突するので、妾は斷て置きました。失禮ですが妾の代りに其所へでも、一時適當の所が見付かるまで行らしては如何ですか。推薦すれば必ず採用するだらうと思ひます。最も日本の若い男を教へるのですから隨分骨も折れ、面から火の出る思をする事も時々ありますが、慣れゝば左程でもありませんよ。兎に角思切て試して見ては如何ですか」と勵め且注意して呉れたので、決心して正則に行く事となつたのが、抑もの始まりで、追々

教へに行く學校の數も多くなり、今では四ヶ所の學校に自用車で順廻して居るのである。其等の學校は大抵午後二時位までに全て終るのであるから、其後の時間は自宅に居る事になつて居た。其で彼女は自宅に無爲な時間を費して行く程餘裕ある生活を生活して行く事は考へることが出來なかつたので、自分の關係ある學校の生徒の中の希望者とか、特別な志望者に自宅で英語會話を教へる事にして居るのである。斯して彼女は咽笛と舌の震動する限りは盡きない鳥語を資本に、假令ば貧弱であるにしても、肉とパンの代を得て、繊弱い肱で二人の子供達に教育を授けつゝ生きて行く雄々しさは、日本婦人等の到底も及ばない、相當教養ある男子ですらも後に瞳若たるものでは無いかと思はれる。彼女の額に襟足に深く刻まれた荒浪の跡は、慥に世上の强烈な風浪と戰かつた悲慘な歴史を物語るべ

き、尊い痕跡である。此澎湃たる怒濤の戰士、荒波の浮世を渡る船人は、其航海の辛苦と困難と悲慘との結晶なる經驗に依て、荒い浪路が客觀的に見るよりも、平安である事を自信自覺して心を安じて居るのである。而して今は異國人てふ稜も女性てふ角も取去られて、只生活の方便であれば、元來が感情とか美意識を心軸として生くべき女性が、多くの場合に於て自己の感情を蹂躙し犧牲として生きて行かなくてはならぬてふ彼女は淺猿しくも可憐しくもある樣に同情を感じた。子供を育て行く方便こそ多少の相異はあるが親として其子を思ふ人の心情は、東西一つである。子供達の成育に心を慰め勵まして行く、彼女の心根は可憐しいと云ふよりも傷ましいのであるが、彼女は境遇に壓せられて動ともすれば賣笑婦の其如く美しい感情の質を思ずして、受くるべき物素の量を考へ、人格の重さを見ず

して、財布の重さを窺はんとする心情に傾き易いのを憐むのである。其罪は決して獨り彼女に而已歸すべきものではあるまい。一個の深刻なる社會問題なのであるまいか。志の有る所色に顯はる。況や賢なり才なりと雖も一個の女性である。彼女は上流婦人とか、又は相當高い位置にありと見ゆる人が行けば、個人教授は幾何共同教授は何程と二樣の別を話して、個人教授の懇切にして上達の速かなるを說いて其虛榮心や好奇心を唆るのであるが、普通の者と見れば只一樣に話して居るのが常であつた。高子にも、

「其で月謝は一ケ月三圓でしゆ。」

と話した。而して其實は個人も共同もない、誰れでも少し話が出來相になれば一樣に車座をして、順番に話をしたり、或は一人立たして怪しげな英語で日常の見聞とか經驗談を話さして、時々發音や慣用

言や文法上の誤謬などを正してゆくのである。其正し樣とか言葉遣の細微な所には、多少は精粗の別はあつて、爭はれぬものだとも思はしめる外には、何の變轍も無い。高子は、

「其では明後日から早速御厄介になる事に致します。」

と叮寧に挨拶をした。

「そうでしゆか。月謝は皆前に貰て居りましゆ。」

とスミスは尋ねずとも厚顏しくも中々注意深い。

「はい、承知致しました。では明後日から參ります。左樣なら。」

と高子は靜かに別を告げた。スミスも座を立て玄關口まで送て來て、

「左樣なら。お父樣に宜敷く。」

とにこ〳〵と黃色い聲でお世辭を振撒いて居た。

其翌々日より高子は愈々スミス先生の所に行かなければならぬと云ふので、學校で學で來た英語のリーダーや、文典の書物を讀漁た。歸途に會話獨習書などまで買て來て間がな讀だ。水曜日の午後二時頃高子は例の如に袴を穿いて、ノートと紫鉛筆を一本とを紫紺色のメリンスの小さな布呂敷に包で、其を小脇に抱込で小刻に六番町の方へとコツ〳〵と足を運だ。前々日行た時に尋ねるのを忘れて來たが、一體最初は如何な事から始めるのかしら」など考へつゝ門前に着いた時は三時には未だ五分程前だつた。鈴を押して門を這入て例の老女さんに聞いて見ると、今日は未だお歸にはなつて居ませんから、暫く腰掛けて待て呉れと室内に案内をして呉れたから、高子は室内に靜かに腰を下して所在なさ相に待て居たが五分は過ぎて三時がチン〳〵と鳴ても潛戸の開く音はしなかつた。奥から最

前の老女が愛憎好く出て來て、「どうもお待遠様でございますね。平日なら、最早お歸りになつて居られる頃ですが、今日は何か特別の御用が出來たのでせうが、もう程なくお歸りでせうから、何卒最少しお待くださいませ。」と盆を片手に持て赤い九谷繪のコーヒ茶碗で綠茶を進めた。高子は「何卒お構なく」と寂やかに挨拶をしながら茶碗を盆から取つた時に、ガラッと潛戸の開いた音がしたので老女は出て行た。高子も先生が歸られたのたなと氣を靜めて待てると、老女さんと語らいながら這入て來たのは一人のハイカラ夫人だつた。何でも矢張會話でも習いに來る人らしい。高子は默て椅子から腰を上げて頭を下げると、其夫人も默禮で答へた。又同じ物音が繰返されたけれども其もスミスではなくて金釦正服の何所かの私立大學生らしい廿二三の青年だつた。這入て來ると高子と他の一人の夫

人に烏渡頭を下げて二階にトン〳〵と上て行た。餘程親しくして居る間柄だと思はれた。三時半は早過ぎた。スミスは見へなかつた。ハイカラ夫人は「もうお歸になり相なものですがね！。」と小い聲で獨語した。高子も「そうでございますはね。」と簡短に口籠る樣に言た。而して西洋人なぞと云ふものも、自分では日本人の時間觀念の乏しいのを罵て、彼等は時間を守る本家本尊の如に口癖に言ては居れど、實際は餘り異た所は無いものだと考へたりして居た。稍暫くすると人力車の鈴が坂下の方から響いて來た。潛戸がガラッ、と威勢好く開いた。而して二三言話聲が聞へて來て、スミスは高子などの待て居た例の室に現はれた。スミスは「皆樣どうもお待遠樣。私是非必要の書物が有て、神田の本屋の方へ廻て居たものでしたから」と平氣な顏である。高子は何か急用でも突發したのかと思ひき

や、本屋廻りなどとは、實際に於ては日本人と西洋人との時間の觀念は餘り懸隔のあるものではない。其を學校の教師などが日本人だけが時間を嚴守しない人種でもある如に倫理の時間などに時々攻撃などするのは誤りであると考へ、或は西洋人が日本に來て日本化せられたものであらうかとも思換へても見た。スミスは別の室に這入て帽子を去て再び出て來た。而して高子を例の夫人に紹介して「此方は矢張り英語の會話を學ひに來られた、高山高子さんと云ふ方であります。あなたと一所にしますから其お積で。」高子は其夫人に向ひ「どうかよろしく」と頭を下げた。すると其夫人は「妾もスミス先生に御厄介になつて居ります者でして、中野國子と申す者でございます。何卒宜敷。」と自己紹介をした。スミスは英語で、

[Which do you like to-day, to have lesson on free conversation or on the

book]

と今日の科題を二人に問掛けた。

[I prefer free conversation betttbr]

と中野と云ふ夫人は覺束なさ相な英語で答へた。

「ナットコンヴーセーション、カンヴーセーション。」

とスミスは可笑な口の形を見せながら直に發音を正して居た。其からスミスと中野は種々の出來事の斷片的感想談を始めた。中野夫人は友人が米國に行くのを、横濱阜頭まで送て行て來たが、別れるのが染々と悲しくなつて潸々と泣いて涙がホロ〳〵流れた事、船が方向轉換をして友人の姿が微かに〳〵見へなくなるまで手巾を伸び上ては振た事、向も相應じて一生懸命に振てた事、船が小さく〳〵殆ど水平線に沒して見えなくなるまで其方を伸上て見送て居た事

などを女の細かい觀察や感情の働儘を話さうとする氣分は漂ふてはゐるが、一つ〳〵の語の間には殆ど滑かな聯絡がないかの樣にポキ〳〵と聞へた。スミスは初の中は時々發音や文法上の動詞のテンスの誤を正して居たが追々話が進むに從て其意味だけを考へて何か感慨に堪へぬ樣に幻影を見る如な眼付をして居た。恐らくは彼女は曾て亡き夫に連れられて祖國の鄕土を遙に船出する時の悲しかりし感想を繰出して來たのだらう。側に默して之を聞いて居た高子は中野と云ふ女の話してる英語の發音やアクセントは西洋人の上面だけを眞似て何となく耳に障る樣な所があると思た。而して此位なら自分にも話せ相なものだと思たが、スミスが「Miss, Takayama. it is now your turn to speak, please tell me any kind of story you like」などと自分の方に向て言ひかけられると、口の中までは來

るが口の外へ出さうも無い。全體としての物語が纏らず、又順々に語を連續して繰出して行かれぬ樣な危なかしい氣がしてならなかつた。で已むを得ず「未だ解りません。」と日本語で斷るより外はなかつた。其から更らに暫らく中野とスミスは、芝居の批評や櫻の花が散て寂しくなつたことなど話合てた。スミスは明日は小說か何かの本で會話練習をすると云ふ事を英語で話した。中野は「はい、宜敷しふございます」と答へた。日科は之で終つた。スミスは奥の室に惹き込んで出て來ると直に後から例の老女さんが例の茶碗に茶を運で來た。而してスミスと中野は茶を啜りながら、日本語半分英語半分の和洋折衷語でペチヤ〳〵話して居た。高子は茶碗を置いて「今日は之で失禮します」と挨拶をした。中野もお辭儀をして。スミスは「左樣なら」と言ひつゝ立て玄關まで送出して來て「又明日いら

づしやい」と笑顔を見せて居た。高子は門前に出てホット溜息を衝いて絹紬に刺繍をしたパラソルを擴げてコツ〳〵と歩て行た。坂を下りて來ると正面から竹子と信吉と一刻も忘れた事のない美夫とが、何やら面白相に話合ながら來るのが見へた。三人は話に夢中になつて、此方から高子の行くのが氣付かぬらしい。高子は竹子を呼懸けて、

「竹子さん〳〵、何所へ行らつしやるの。」

と側に寄て行た。竹子は不意を打たれて、烏渡面を食たと云ふ表情をして、

「妾驚愕したは。九段まで散歩するんですから、一所に行きませうよ。あなたは何所へ行らしてたの。」

と早高子の手を執て歩み出すのである。高子は手を柔かに振放し

て、

「妾此上まで用事で行つてたのよ。直に歸らなくちやならないんですから又今度一所に行きますは。」

「用事て何なの。直に歸て來るんですから是非一所に行きませうよ。ね！、一所に行かなきや離さないは。」

と再び高子の手を取て離さないのと、一つは美夫の姿が見へたので自然に惹き付けらるゝ如に竹子に隨いて行く事にしたのである。美夫と信吉は少し先へ歩で行て居たが、立止て此方を振向いた。而して美夫は二人が引張り合うて居る樣子を見て、

「何をして居るんですか。早く行きませう。高子さんも一所に行きませうよ。」

と促した。高子は美夫に初めて高子さんと呼ばれた聲が美妙な音

樂よりも遙に〳〵神祕に響く樣に思ふた。而して自分と云ふものと自分の名前を美夫の淸い胸の中に抱かれて居ると云ふ事を思ふては嬉しくて〳〵堪へ難い氣がした。で高子も心を强いて狂げて

「行きす〳〵。けども遲くなると怒られますから、早く行て來ませうよ。」

と竹子と共に步み出した。而して美夫に近くと、高子は變な風に首を拗戾して、

「如何もすみませんでした。」

と囁く樣に言た。四人の者は橫に列んで、ゾロ〳〵と步んで行た。高子と美夫とは意識せずして隣合つて居た。高子の片端に竹子がなつて、信吉は美夫の方の端になつて居た。而して高子と竹子は互に話を續けて居た。

「眞實に何所へ行て居らしてたの。」

と竹子に繰返して問はるゝ儘に、高子は、

「眞實はね！。あなたが女子大學は英語の會話が嚴しいてふ話でしたから、此先のミセス、スミスと云ふ家に今日から會話を習ひに行き始めた所なのよ。」

「そう！、スミスてふ先生は若い人なんですか。」

「否へ、もうおばーさんなのよ。」

「幾歲位の方なんです。」

「五十よりか未だ餘程年寄に見へますが幾歲かよく知りませんは。」

「そう！、それぢやもう隨分老人ね。親切に敎へて呉れますか。」

「今日から行てるんですから好く判らないは。其はそうと君子さんにあれから會ひましたか。」

と二人は話に餘念がなかつた。徐々と靖國神社に近付いた時に一人の青年が車に乘て摺違に通り過た。其が彼等四人を見ると帽子を取て默禮をして過ぎた。美夫は見覺がないので、不思議に思た。而して人違か或は竹子の知人ではあるまいかと思て、竹子に尋ねた。

「竹子さん、今通て行た方知て居ますか。」

「私好く氣が付かなかつたから判らないは。高子さんの知て居らつしやる方ぢやゞなくつて。」

「私も好く見ませんでしたから判りませんでしたよ。」

「そうですね。廿五六のハイカラな脊廣の洋服を着た人でしたね。」

と美夫は印象に殘た外觀だけを話した。高子は若しや菅野ではあるまいかと、悖乎としたが、其時は既に名前を言ふのが何とはなしに厭はしかつたので、

「思出せませんが、多分人間違で挨拶して行たんでせう。」

と高子は言出した。四人連は靖國神社の境内に何時の間にか這入て居た。而して順次に手洗水を使ふて、竹子の出した手巾で手を拭ふて神前に詣で拜した。其から右手の大砲の据てある所から裏手の噴永のある池の所まで來た。池には赤い金魚や黑い鯉が、水面に白く浮いてる櫻の花瓣に快活に弄れて居た。高子は鯉を抱へて居る金太郎の噴水塔が、常日になく面白く感ぜられて、無邪氣な信吉と共に愉快相に一生懸命に見惚れて居た。竹子は、

「高子さん、少し此ベンチで休んで行きませう。美夫さんもお掛けなさいな。」

と云ひながら腰を下した。美夫も續いて默したまゝ腰を掛けた。高子も直に美夫の傍に掛けた。

「斯して皆で歩いてると、全で皆兄弟の如ですね。高子さん、之から美夫さんを兄さんて呼ばうぢやありませんか。美夫さん、好いでせう。」

と竹子が美夫に提議をした。高子は、

「眞實に好い兄さんね、妾にも斯麼兄さんがあつたら嬉しいのですけど。」

と憧憬げに下向いて言ひ次いだ。美夫は微笑みながら、

「とんでもない兄さんですね。僕は構ひませんが、あなた方が御迷惑でせう。」

と弄れた如な口調で答へて居た。高子は更に、

「それぢや之から兄さんて呼びますよ。宜うございますか。」

と念を押す樣に小聲で言ふた。高子の心裡には此の時に全く此雲

の浮世に、自分唯一人は堅固な礎に築かれた城塞に抱かれて、朝の美はしい花園に遊ぶ如な幸福と、夕の清い月に照らされてる如な靜かな平安さを得て、暴風の如な猛火の如な世の中の全ての悲痛爭鬪を防禦し保護して呉れる對照を得た樣な喜悅の感に充たされてる如く活々とした快感を覺へて居た。竹子は高子が如何にも快さ相に乾燥いで居る樣子が嬉しくもあり、少し妬ましくも思た。けれども何氣もない體で、

「構いませんよ。けれども家に居る時は可笑しいから止しませうよ。一度兄さんの呼び稽古をして見ませうか。」

「滊車の辨當賣の樣に呼聲の稽古は驚きましたね。」

と美夫も此時心中には春の曙の如な清々しい希望に滿ちたる快さと、曠々果しない炎熱の砂漠の如な世界に冷水滾々たる泉の上に綠

の樹蔭の蓋た所を發見した如な生の悦ばしさを感ぜずには居られなかつた。其喜は自己の内部に潜めて置くには餘りに強く且つ浪立たので、戯れる如に斯言ふて見たのであつた。竹子は直に、

「今呼びますから直に返事をしなくつちやいけませんよ。言ますよ。宜うございますか。言ますよ。何だか初めてだから變な氣持ね。言ますよ。兄さん。」

と笑顔をしながら呼だ。

「はい！。」

と美夫も微笑を口邊に湛へながら答へた。竹子は黄色い聲で、

「あらつ、兄さんが、はいは可笑いは。」

「ぢや何と返事をすれば好いんですか。」

と眞面になつて聞く。竹子は浮き〳〵した態度で、

「兄さんが妹に返事をするんだから解てるぢやありませんか。あゝとか、うんとか、えゝとか言へば好いんでせう。最一度やり直しますよ。宜うございますか。……兄さん。」

「あゝ。是で好いでせう。中々〳〵六ヶ敷いんですね。」

「始めてだからまあ其位で勘辨してあげませう。」

と冗談半分に竹子は言て、

「高子さん、あなたも一度稽古をしてご覧なさい。」

「でも何だか可笑しいは。」

と高子は有繋に品を作る樣子をする。竹子は嗾む眞似をして、

「兄弟を呼ぶのを可笑しいなんて、其が餘程可笑しい事よ。呼ぶのが嫌なら兄弟の縁を切りますよ。」

「それぢや言て見るは。でも何だか變だはね。それぢや、に、兄さん。」

「はあー。あー。」

「それぢやが餘計よ。美夫さんも言直したのが落第だから今一度やり直しですよ。」

と竹子は世話を燒いて居た。高子は顔を紅らめ笑いながら再び、

「兄さん。」

「あー。」

と答へた。竹子は笑ひ崩れつゝ、

「上出來〳〵。眞實の兄弟見たいだは。遲くなるから又徐々歩いて歸りませうかね。信ちやん、もう歸るのよ。」

と池の鯉に見惚れてた信吉を呼んでベンチを離れて踵を廻らした。

高子は、

「兄さんもぼつ〳〵行きませう。」

と早速透さず心の底から聲の迸るまゝに呼だ。すると竹子は、

「早速兄さんの應用をしましたのね。」

と側から言て笑た。四人の者が富士見町通に出た時は、春の長い日も暮れて、既店並の電燈は白く點て居た。

「隨分遲くなつたは、お父樣に怒られかも知れませんは。」

と高子は心配げに悲し相な聲を震はした。竹子は、

「お父樣に怒られたら、妾が言譯をしてあげますよ。ほんとに序に送て行てあげませうか。」

「否へ、宜うござんすは。妾此方の道から行きますから。此所で別れませうね。左樣なら。」

「其ぢや左樣なら。氣を付て行らつしやいな。」

と竹子は女性の友情の流石に濃かである。美夫も、

「高子さん、左様なら。」

と少し後れて別を告げた。信吉も聲高に別を告げて、高子は三人と袖を別た。高子は最前の偶然な出來事を考へると遣瀬もなく嬉しかつた。ほの暗い途を光り輝く明るい思を抱いて歩みつゝ、噴水の邊の語ひを胸の中で思浮べては其を繰返した。稍ともすれば不意識の中に其が咽喉から口先まで聲が洩れ出す事があつて、自分なから可笑ので腹で笑い〳〵しては歸て來た。其晩には父は外出したと見へ家には居なかつた。母だけだつたので、高子は人違で警察にでも呼出された時の如に、自分の豫期した恐怖から免れて、ホット吐息を衝いた。其でも母は「今日はお前遲かつたね。」と言て迎へた。高子も單に「えー、今日はねー、歸る途中で竹子さんに會て話をして居たもんですから。」と何氣なく答へて、母の心には疑の小波をも揚げ

なかつたから、高子の心には微動も波紋も與へずして過ぎた。斯麼場合に父が居たなれば、根堀り、葉堀りに行動を聞き正され、言語に曖昧な點などがあれば、宗教家としての日頃の謹嚴なる態度にも似ず憤激の餘りに罵詈讒謗を加へる事もあるのである。其翌日も矢張り同じ時間にスミスの宅に出懸けた。其日はスミス先生は宅に居た。而して高子を迎へ入れて「あなた大變早く來ましたでしゆね。」と大層愛憎が好かつた。中野と云ふ婦人も他の者は誰も來て居なかつたが、スミスと話をするのも未だ妙な氣がして居たので、先生から時々何か尋ねられる事があつても、單に、然、否、で通して手持無沙汰な風をして居た。スミスが「此方のルームにお出なしやい。」と襖をスーッと兩方に開いて次の室に案内したので、高子は後から靜かに從いて入た。其室は八疊敷位で窓には純白の細かい美しい模樣の

レースの窓掛が掛て居て其所から外の緑い植込が透て見てた。而して窓の壁に着けて黒塗の剝げかゝつた古びたピアノが一臺据へてあつた。此ピアノはスミス先生が若葉萠へ出る青春の頃、亡き夫博士と結婚の際に、彼女の身心と共に夫の家に運ばれて、此ピアノの妙なる音に若き佳人と美青年とは恍惚として搔綜の現世を忘れ、魂は天上の樂園の彼方に飛で、若き血汐の杯を汲み交し、蜜よりも甘く醲よりも濃なる睦語に神祕の鎖した夜深く更した事も屢々あつて、其が今は悲しき思出の記念に殘て居るてふ事を物語りたい如な色をして居た。而して霜枯れの秋深い淋しい更夜に亡き夫の事など思出でて、感餘せめてもの心遣に樂しかりし夕の一曲を彈奏する時の心持ちは如何であらう。斯麼事を考へつゝ此古びた一臺のピアノを見て、高子は無限のローマンスの震動に打れた。此ピアノの上

に青銅の龍が水晶玉を掴でる置物が据てあつた。高子は賞めるともなしに「此龍は面白いものでございますね。」と指した。スミスは「之は正則の生徒が卒業紀念にプレセントして呉れたのです。」と話した。其横には簞笥の抽出など付いて、其上の後には一面に鏡が張た、簞笥鏡臺共用と云ふ風な物があつて、鏡の前面には白麻の透編の飾の入たビユウロー、スカーフが敷いて、化粧道具など列べてあつた。其所に九谷燒らしい陶器の大きな置物などがあつた。高子が手に取ては見て居るのを見て、「其は野村菊枝と云ふ女子大學を出た方が呉れました。」と説明した。室の中央には大きな卓子が据へてあつた。而して其上には色々の物が雜然と列で居た。食卓と机と兼用のものだと思はれた。其周圍には四五脚の籐椅子と子供の小さい椅子があつた。スミスは「まあお掛なさい。」と言ふた。高子は

先生の語に從て押し付けられる如に腰を下した。すると其上にあつた錦手の薩摩の大皿や丼などを、高子に見せては喜で居た。高子は、「之は薩摩燒ですか」と問ふと、「あなた瀨戸ものの事判りますか」と更にピアノに面した側の押入の中から支那の陶器らしい黃色や青色の勝た模樣の、大きな花瓶や小さな香料瓶、さては一輪差の樣なものまで澤山出して來て、一々自分の手から高子に渡しては見せた。その後で一つ〳〵此は誰、彼は何と云ふ人と、自分に與へた人を說明するのであつた。スミス先生としては贈られたてふ嬉しさと誇とを回想する積であらうが、其が高子には何だか當擦られる樣に、何かの暗示を受けてる樣に妙に陋劣の感を與さずには居られ無かつた。而して彼女は何となく先生を物質主義拜金主義の人だと直覺した。スミスは更に「斯麼もの見てるの大變好きでしゆ。」と言出した。高

子も「全く奇麗でございますね。」と相應ぜざるを得なかつた。高子は卓子の上に寫眞畫のある英語の雜誌などを手に取て見始めた。するとスミスは立て行てピアノの鍵を開けながら「あなたピアノ好きですか。」と言ひつゝポン〳〵と彈いて見せて、「あなたブレー出來ますか。」と尋ねた。高子は「少しは能きます。けれども西洋のものは知りません。」と答へる、スミスは「其では何でも奏してごらんなさい。」と椅子を與へた。高子は愼ましい樣な恥し相な容姿をして、ピアノの前に擦り寄り、學校で稽古した極容易しい唱歌の一曲を彈じた。「譜がありませんから好く彈けません。」と言ながら六段を彈き始めた時に玄關に人の來た物音がして、スミスは出て行た。高子は手を休めて靜かに耳を澄して待て居た。「連が來ましたから始めませう。」と呼ばれて、ピアノを其儘に元の室に這入て行た。連と云ふ

のは他の人と思懸けなくも中野國子であつた。烏渡互に挨拶をして、スミスは「今日は此本で會話をしませう。」と言ひながら、自分獨りべラ〳〵と鼻眼鏡越に讀んで居た。其は何でもシエークスピアのハムレットか何かの劇の脚本ものらしく暫らくすると劇の舞台の話など勝手に始めて居た。而して名詞の烏渡變たものがあると、一々二人に向て質問をして居た。中野夫人が何だか廻くどい英語で答へると、スミスは更に細かな説明をして居た。高子にも好く判り切ては居るが、去來となると口へは出て來ないので、今日も默て二人の話を聽き過して歸た。今日は五時にならぬ前に何にも思はずに平穩な思で歸り著いた。すると座敷に上るや否や、弟の正之進が「お父樣が烏渡お出でつて。何だか怒つてるよ。」と告げた。高子は何等の怒らるべき暗い影を思出せないので、不思議な不安定な思で恐

る〳〵父の室に這入て見ると、父は意外にも險阻な顏をして、

「高子、まあ其所へおすわり。お前は昨日何時頃歸て來たのかね。」

と詰問するのである。如何した譯か昨日の夕方歸た時は父は確に留守であつたのに不思議だと訝りつゝ、

「明瞭は判りませんでしたが、七時頃だつたと思ひます。」

と高子は何氣ない顏で答へた。すると父牧師は語氣荒く忿怒の情を面に表して、

「お前は實に怪しからん女だ。私に彼れ程眞面目に懇請て英語の會話を習ひに行くなんて出て行て、歸途に若い男とブラ〳〵と一所に遊び歩いてたと云ふぢやないか。親を僞る如な愚なものは、遂には神樣までも欺く樣になるのだ。お前は何日の間に其那氣になつたのだ。馬鹿めが」

と眞向から勢鋭く詰掛けられて、高子は今は氣が氣でない。

「お父樣を僞る樣な事はありませんは。」

と答へる聲は細く微かな震へを帶びて居た。

「其ではお前は其麼者と歩いてた覺が無いと言ふのか。見て居て話して呉れた人があるんだぞ。」

と父の瞋恚の炎は益々烈しく炎へ立ち、追窮は愈々急である。其語で高子は九段の附近で車上で帽子を翳して走り過ぎたてふ男の姿を電の如に思浮べて、其が管野らしく直感したので、只口惜しい樣に思はれて、最早長い睫には白玉の露さへ宿して居た。

「見て居た方てのは何方か話して頂戴。」

と既に事を理けて話をする理性さへ炎へ立つ感情に沒却して居た。

「其を言ふ必要はない。其が事實なら其で好いのだ。」

「管野さんぢやありませんか。」

とおろ〳〵聲で聞くと、父は更に憤の語氣鋭く

「誰でも好い。兎に角お前も私の娘として若し醜劣な噂でも立てられては、友人や信者の前に顏出しが出來ない。だから今の中に警戒を加へるのだ。明日からはもう英語の會話など習ひに行くのは當分止めるがよい。」

と命ぜられた高子は折角志した會話を己めなければならぬてふ悲しみ、人を中傷して陷れた管野に對する憎惡の念が込上げて、啜り泣かんばかりに悔しかつた。

「でもお父樣。」

と父の心を翻さんとは思ふけれども力無く口寵て舌は鉛の樣に重く震動しなかつた。

「でもではない。お前の態度が益々怪しい。」

と云ひ放たれて、高子はもう堪へ難く悲しく奥齒を喰ひ縛た。眼に袖を押當て、泪を押拭ひ、目を瞬きながら、

「昨日先生の所から歸る途中で、竹子さんが向から竹子さんの親戚の美夫さんて方と弟の信ちやんとが一所に來るのに出會したのです。其で私が鳥渡お辭儀をしたら直其邊まで行くのだから一所に行きませうと仰言たから、私は遲くなるから止ますと斷たのですけど、竹子さんが手を掴で是非行きませう直ぐ歸るのだから と言て離して呉れませんから、不已得に從いて行たのです。而して九段を廻て來ただけなのです。」

と吃りながら聲を振はして獨語の如に答へて居た。次の室に居た母の德子に其が聞へたと見へて、靜かに高子の側に躙寄て、

「お前一體如何したの。」

と心配相な容子で尋ねた。父は直に德子に向ひ、

「此子が昨日若い男と手を執らんばかりにして、一所に歩いてたと云ふので、今日菅野君に會たら忠告をして呉れて、少し誡められた方が好いでせう、と親切に話して呉れたものだから、今話して聞かせて居る所だ。私には一口も遲くなつたなぞとは言ひもせずに困たものだ。だから其麼方面の學校はもう中止にした方が好いだらうと思て、今そう命令た所だ。」

「そう言へば昨日歸た時に、私に友達と一所に散歩して來たので遲くなつたつて斷て居ましたよ。何でも竹子さんと一所に何所かへ行たとか云ふ話でしたよ。」

と母は極力娘の庇護をするのである。其が高子には百萬の援兵よ

りも心強く感じた。父は宗教家似氣なく疑ひ深く一寸嘲笑ふ樣に

「あてになるものぢやない。」

と言ふと、母は靜かに高子に向ひ、

「お前眞實だらうね。」

と優しく面を窺き込で問ふた。

「えー。妾虚言なんか言はないは。竹子さんに尋ねてくだしたら直に判明るは。」

と高子は漸く騷げる心を落付けて語た。すると母は更に父の心を宥める樣に、

「高子もあゝ言て居るのですから、眞逆虚言も言ますまいから、今日は之で忍へておやりなすつては如何です。若し何でしたら竹子さんに聞けば好く判明る事ですからね、お父さん。」

と飽くまで辯護して呉れた。其心根の優しさに高子は更に嬉しさに堪へ兼ねて、熱い〳〵涙を一滴ホロリと膝に零した。其でも父の疑心の雲は尙も解け難く、

「まあ當分止した方が好い。幸に家事も忙しいのだから。」

と最後の宣言を下された。母は尙も高子を庇ふて、

「竹子さんが來らしたら判る事だから、其まで辛捧をしてお出で。而して竹子さんからお父樣に直接に話して戴きさへすればお父樣のお疑も晴れるのだからね。もう此方へお出なさい。」

と高子を伴れて次の室に去て、其場は終たが高子は悔しくて〳〵ならなかつた。而して其中傷者が菅野と知て悲さが尙更胸を衝いて込み上げた。菅野が常に高尙振た事を半面に言ひながら、其心事の陋劣なのを憎まずには居られなかつた。此出來事が有てからは菅

野に對する感情と、美夫に對する其とは、逆比例に內面的立體的に强い勢で發展をした。前者に對する反感に反して後者に對する好感同情は益々增し加へられて行た。

高子は直に竹子に端書を認めて、

「前略、昨日は誠に失禮いたしまいらせ候　就ては其事につき鳥渡あなたより父上にお話願たき事有之候まゝ明夕お手すきなれば妾の家にお出くださるまじく哉待上まゐらせ候。委細はおめもじのうへにて。

あらく

として自分で角のポストに投入れた。

其翌朝竹子は端書を讀で見て何事が突發したのかと驚いて、其日の夕刻學校の歸り途に高子の宅に立寄た。高子は竹子を喜び迎へて、

「好く來て呉れましたはね。其はそうとね、昨日餘り遲くなつたものだから遂々お父樣に怒られてしまいましたわ。」

「そうですか。眞にすみませんでしたはね。私が無理に引張て行たものですから、私が惡かつたのよ。」

と常になくシンミリと眞面で竹子は慰めた。高子は、

「あなたが惡い事は少しもないのよ。あなたが勸めても妾が行かなければ好かつたのよ。其麼事は如何でも宜うございますから、お父樣にあなたと一所に九段へ行たてふ事だけを話してくださいませんか。」

と互に庇ひ合ひ勞り合ふた。

「えーく、宜うございますとも。直に話してあげますわ。」

と溫和な竹子も友の難を聞いては少しも躊躇する色は無かつた。

高子は座を立て、

「其ぢや鳥渡此方へ來てくださいませんか。」

と父の居室に案内した。竹子は高子の後を追ふて、牧師の室に胸に微かな動悸を打たしながら慎まし氣な態度で入た。すると高子は靜に座て、

「竹子さんが見へましだから、お伴れしました。」

と父に聲低く告げた。父牧師は、

「あゝそうですか。其はどうも。」

と昨日の氣色とは打て變て微笑かに挨拶をして。竹子は何とはなく少し極りが惡い樣に、もぢ〳〵しながら叮寧に頭を下げて、

「今日は。追々お暖かになつて參りました。」

と寂やかに挨拶をして後に語を次いで、

「妾は高子さんが、今朝端書をくださつたので、お伺ひを申しましたのですが、今高子さんから承りますと、一昨日高子さんのお歸りが遲かつたので、大變に御立腹だ相でございますが、其は妾が無理やりに九段までお連れ申しましたものですから、其で遂彼麼に遲くなつたのでございまして、全く妾が惡かつたのでございます。何にも考へずに誠に濟みません事を致しました。何卒お許しください まし。」

と自分が其罪の全體を犯した如に高山牧師に詫び入た。高山牧師も自分の憤怒つた事が今更間が惡る相に、

「なーに、其麼話なら好いですが、一寸妙な話を聞いだものですから、あなたと一所に九段に行たのですが。そうでしたか。」

と更に色を和げ微笑さへ含んで優しく語た。

「九段まで美夫さんてふ、妾の宅に居る親戚の方と、信吉と三人で散歩に出懸けようとする所にお目に懸たものですから遂イ…。」

と竹子は手をモジ〳〵させながら更に言足した。

「そうですか。いや好く判明りまして。何しろ變な事で醜聞を流される樣な事があると困るものですから。如何も態々有難ふございました。お氣の毒でした。」

と全く了解された樣子を見て、高子は喜と一種の誇かしい氣分さへる感じて、

「竹子さん、どうも有難ふ。」

と謝辭を述べた。高子の身に低迷した一團の疑雲は、春の涼風に吹き拂はれて、あはれ白日皎々たる身となつた。其でも父の牧師は斯麼出來事が全く菅野の嫉妬心に依て釀されたのではあるが、彼は菅

野の嫉妬の餘りに生じたのであると云ふ事は微塵も思はずして、彼を尙も正直なる忠告者と已而信じて居た。其時以後高子は菅野が尋ねて來てもなるべく接近すまいと決心した。性に對する嫉妬富に對する嫉妬、位に對する嫉妬と嫉妬心にも種々の別はあるが全て完全な精神狀態では無い。一種の精神病である。此病氣に侵された者は恰も放火狂の如くに、彼等の炎す焔は自他を燒害せずば已まないのである。英雄時に此病に倒れ、偉人も偶に迷のである。此病を根治するには虛心と云ふ神醫に接し澄明なる判斷と云ふ天藥を服すべきである。精神內容に澄明空虛を體得した達人の心事は常に平和であり、穩健なのであらう。